

# 編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

受理番号	学校	教科	種目	学年
107-222	高等学校	国語科	古典探究	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教科書名		

## 1. 編修の基本方針

1. 古典のすぐれた文章に触れることにより、言語感覚を磨き、知識と教養を身に付け、豊かな感性や情緒を育むことができるようにした。
2. 生徒が自主的・主体的に学習活動を行うことにより、思考力・判断力・表現力を養い、自発的・創造的な人間形成に進むことができるよう考慮した。
3. 対話的・協働的な学習活動を積み重ねることにより、さまざまな社会的要請に応え得る人間性の育成に役立てられるようにした。
4. 人間・生命・自然などに目を向けさせ、それらが我が国の伝統的な文化の中でどのように表現されてきたかを知ることができるように配慮した。
5. 歴史的・文化的背景を踏まえて我が国の伝統的な言語文化を捉え、生徒一人一人がその担い手であることを自覚させることを期した。

## 2. 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
古文編	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典としてすぐれた作品を採録し、作品の鑑賞を通して、豊かな情操と道徳心を養うことができるよう配慮した（第1号）。</li> <li>・主として随筆・評論教材を通して、真理を探究する人間のさまざまなありようを示すことにより、生徒の人間性・社会性の涵養に働きかけられる題材を採録した（第1号）。</li> <li>・「古文を読むために」を適宜設定して、文語のきまり等について知識を補えるようにした（第1号）。</li> <li>・「古典のしるべ」を適宜設定し、興味・関心に応じて知識と教養を広げられるようにするとともに、生徒を読書へ誘うようにした（第1号）。</li> <li>・「参考図録」を適宜設定し、古文の読解に必要な知識を身に付けるとともに、伝統と文化に親しめるように配慮した（第1号・第5号）。</li> </ul>	<p>p. 16～151</p> <p>p. 28～35 p. 142～145 p. 148～151</p> <p>p. 22 p. 36～37 p. 54～55</p> <p>p. 56 p. 66 p. 80 p. 100 p. 140 p. 147</p> <p>p. 78～79 p. 112～113 p. 136～139</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「言語活動」を通して、主体性を発揮して課題に取り組めるようにした（第2号）。</li> </ul>	<p>p. 20～21 p. 38 p. 63 p. 76 ～77 p. 92 p. 114 p. 125 p. 126 p. 146 p. 152</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典における人間関係や社会理念に深く関わる題材を採録し、生徒が現代にも共通する問題として考えを深められるようにした（第3号）。</li> </ul>	<p>p. 16～21 p. 24～35 p. 40～53 p. 58～p. 64 p. 94～99 p. 102～111 p. 116～124 p. 128～135</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古代の戦乱を取り上げた題材を採録し、人間の感情の普遍性を読み取ることによって、生徒が倫理や道徳の問題を現実的に即して考察できるよう配慮した（第4号）。</li> <li>・生命や自然に深く関わる題材を採録し、生命・自然を尊重する態度を養うとともに、生徒が自らの問題として考えを深めることができるよう配慮した（第4号）。</li> </ul>	<p>p. 68～75</p> <p>p. 34～35 p. 59～61 p. 82～91</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評論教材および古典に関する現代の文章教材を通して、生徒が先人にならって言語文化に対する考えを深められるようにした（第5号）。</li> </ul>	<p>p. 10～14 p. 120～124 p. 142～145 p. 148～151</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>各単元の扉に作品・作者などに関する解説欄を設けるとともに、「言語活動」において我が国の伝統的な文化を解説することにより、興味・関心を喚起できるようにした（第5号）。</li> </ul>	<p>p. 15 p. 23 p. 38 p. 39 p. 57 p. 67 p. 81 p. 92 p. 93 p. 101 p. 115 p. 126 p. 127 p. 141</p>
漢文編	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典としてすぐれた作品を採録し、作品の鑑賞を通して、豊かな情操と道徳心を養うことができるよう配慮した（第1号）。</li> <li>主として思想教材を通して、真理を探究する人間のさまざまなありようを示すことによって、生徒の人間性・社会性の涵養に働きかけられる題材を採録した（第1号）。</li> <li>「漢文を読むために」を適宜設定して、漢文訓読のきまり等について知識を補えるようにした（第1号）。</li> <li>「古典のしるべ」を適宜設定し、興味・関心に応じて知識と教養を広げられるようにするとともに、生徒を読書へ誘うようにした（第1号）。</li> <li>「参考図録」を適宜設定し、漢文の読解に必要な知識を身に付けるとともに、伝統と文化に親しめるように配慮した（第1号・第5号）。</li> </ul>	<p>p. 160～265</p> <p>p. 192～203</p> <p>p. 166～167 p. 224</p> <p>p. 190 p. 212 p. 266</p> <p>p. 222～223 p. 256～257</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>「言語活動」を通して、主体性を発揮して課題に取り組めるようにした（第2号）。</li> </ul>	<p>p. 168 p. 176～177 p. 178～180 p. 204 p. 237～238 p. 258</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>古典における人間関係や社会理念に深く関わる題材を採録し、生徒が現代にも共通する問題として考えを深められるようにした（第3号）。</li> </ul>	<p>p. 182～189 p. 206～211 p. 260～265</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>古代の戦乱を取り上げた題材を採録し、人間の感情の普遍性を読み取ることによって、生徒が倫理や道徳の問題を現実にも即して考察できるよう配慮した（第4号）。</li> <li>生命や自然に深く関わる題材を採録し、生命・自然を尊重する態度を養うとともに、生徒が自らの問題として考えを深めることができるよう配慮した（第4号）。</li> </ul>	<p>p. 206～207 p. 214～221 p. 240～255</p> <p>p. 170～173</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>故事・寓話教材および古典に関する現代の文章教材を通して、生徒が先人にならって言語文化に対する考えを深められるようにした（第5号）。</li> <li>各単元の扉に作品・作者などに関する解説欄を設けるとともに、「言語活動」において我が国の言語文化に影響を与えた中国の伝統的な文化を解説することにより、興味・関心を喚起できるようにした（第5号）。</li> </ul>	<p>p. 154～158 p. 160～165</p> <p>p. 159 p. 169 p. 178～180 p. 181 p. 191 p. 204 p. 205 p. 213 p. 225 p. 237 p. 239 p. 259</p>
資料編等	<ul style="list-style-type: none"> <li>前見返に「読書のしるべ」を設定して、読書へ誘うとともに、生徒の興味・関心に応じて知識と教養を広げられるようにした（第1号）。</li> <li>資料編に「文語文法要覧」「漢文基本句形一覧」等を用意し、古典の読解に必要な知識を身に付けることができるようにした（第1号）。</li> <li>資料編に「古典文学史年表」「中国文化史年表」を、巻末に「図録」「地図」を用意し、古典の読解に必要な知識を身に付けるとともに、伝統と文化に親しめるように配慮した（第1号・第5号）。</li> </ul>	<p>前見返</p> <p>p. 280～299</p> <p>p. 268～279 巻末<sup>1</sup>～<sup>23</sup></p>

### 3. 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- 第二条第3号及び、学校教育法第51条1号「国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと」、また、第3号「社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」を踏まえ、各教材の最後に「学習の手引き」「言葉の手引き」といった課題を用意し、発表や話し合いを含む多様な学習活動を設定した。教材の内容や構成などについて理解を深め、自らの考えを的確に表現する資質・能力を養うとともに、生徒相互の意見交流を通じて、多角的で客観性のある批判的思考能力を養えるよう配慮した。
- 書体にユニバーサルデザインフォントを取り入れたほか、カラーユニバーサルデザインにも配慮し、すべての生徒にとって学びやすい紙面となるよう配慮した。

# 編 修 趣 意 書

(学習指導要領との対照表、配当授業時数表)

受理番号	学校	教科	種目	学年
107-222	高等学校	国語科	古典探究	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教科書名		

## 1. 編修上特に意を用いた点や特色

### ①単元構成・教材選定

- ・「言語文化」で育成された資質・能力をさらに推し進め、論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすために、読むことの資質・能力を伸ばすための学びと、我が国の言語文化に対する理解を深めるための学びとが、それぞれ系統的に行えるように教材を配置した。
- ・教育現場の意見・要望を尊重し、学習指導の実態に即応できるよう、古文編と漢文編の合冊形態とした。それぞれの内は学習段階を考慮して二部構成とし、各部は文種(ジャンル)を基本にした単元構成とした。
- ・古文、漢文の教材の選定にあたっては、生徒の発達段階を考慮して、高校生として知っておくべき評価の定まった作品から、文種、長短、難易などに配慮しつつ厳選することを旨とした。
- ・日本漢詩を取り上げて、我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深められるようにした。
- ・古文の評論や漢文の思想を取り上げて、古典の学習においても文学的文章に偏ることなく、論理的思考力を伸ばすことのできる教材を用意した。また、古典についての解説文として「百人一首という感情」「心に息づく漢詩の言葉」を採録した。
- ・各単元の扉に、該当単元の教材で何を学ぶかを「学習のねらい」として示し、教材の意図を学習者全体で共有しながら学びに取り組むことができるようにした。→「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る」ための配慮。

### ②[知識及び技能]への対応

- ・古文で「言葉の手引き」を設定したり、「重要古語」(古文)や「基本句形」(漢文)を抽出したりして、「A 読むこと」の内容と関連づけながら、古語の意味や、文語・訓読のきまりなどの知識を深めるとともに、文脈の中で語感を磨き、語彙を豊かにできるようにした。
- ・巻頭に「読書のしるべ」を用意して、採録した古典に関連する、解説・現代語訳などの書籍を幅広く紹介し、主体的な読書へ導くことができるようにした。
- ・巻末に「資料編」「図録」「地図」等を用意し、豊富な資料や写真・図版を掲載して、知識をより深めるための一助とした。

### ③[思考力、判断力、表現力等]への対応

- ・「A 読むこと」に関しては、脚注の「問」、および「学習の手引き」の課題設定によって、作品の内容理解を深め、興味を広げることができるようにした。
  - ＊「問」は、本文を解釈するうえでポイントとなる箇所、内容理解を確認する目的で示した。
  - ＊「学習の手引き」は、文章全体の構成や展開の把握、「学習のねらい」に沿った内容の解釈を基本として、生徒のものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりできる設問を用意し、発表したり話し合ったり文章にまとめたりといった活動ができるようにした。
- ・「学習の手引き」とは別に、「A 読むこと」の言語活動が十分行われることを企図して、「言語活動」を随所に設定し、生徒の主体的・対話的で深い学びを促した(エ【朗読】については「和歌・俳諧」の「学習の手引き」で対応した)。

ア【内容、形式】 p.20～21 p.114 p.125 p.126 p.168 p.258

イ【読み比べ】 p.146 p.152 p.176～177 p.237～238

ウ【創作】 p.92 p.178～180

オ【調査、報告】 p.38 p.125 p.152

カ【言葉の変遷】 p.63 p.76～77

キ【名句・名言】 p.204

2. 対照表

図書の構成・内容		学習指導要領の内容				該当箇所	配当 時数
		知識及び技能		思考力・表現力・判断力等			
部	単元	教材	(1)	(2)	読むこと(1)	読むこと(2)	
古文編・ 第一部	説話(一)	百人一首という感情		ア		ア	p.10-p.14
		十訓抄	ア	イ	ア・イ・ウ	ア	p.16-p.17
		古今著聞集	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.18-p.19
		〔言語活動〕小式部内侍と和泉式部 古文を読むために1		エ	キ	ア	p.20-p.21 p.22
	随筆(一)	徒然草	ア・イ・ウ・エ	イ	ア・イ・ウ	ア	p.24-p.31
		方丈記	ア・イ・エ	ア・イ・エ	ア・イ・ウ・オ・カ・キ	ア・イ・オ	p.32-p.35
		〔言語活動〕貴族の生活と年中行事 古文を読むために2		イ			p.36-p.37 p.38
	物語(一)	伊勢物語	ア・イ	イ	ア・イ	ア	p.40-p.45
		竹取物語	ア・イ・ウ・エ	イ	ア・イ・ウ	ア	p.46-p.53
		〔言語活動〕貴族の生活と年中行事 古文を読むために3 〔古典のしるべ〕平安時代の恋愛事情		イ ア・エ			p.54-p.55 p.56
	随筆(二)	枕草子	ア・イ	ア・イ	ア・イ	ア	p.58-p.65
		〔言語活動〕古語と現代語を比較する 〔古典のしるべ〕撰閣政治と女房、文学	ア	ウ ア・エ	ク	カ	p.63 p.66
		平家物語	ア・イ・エ	イ	ア・イ・カ	ア	p.68-p.75
	物語(二)	〔言語活動〕読み比べる・平家物語 〔古典のしるべ〕平家の怨霊	イ	ア・イ・ウ・エ ア	エ・オ・キ	カ	p.76-p.77 p.80
		万葉集	イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア・エ	p.82-p.84
		古今和歌集	イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア	p.85-p.87
	和歌・俳諧	新古今和歌集	イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア	p.88-p.89
		春夏秋冬	イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア・エ	p.90-p.91
〔言語活動〕切れ字を使って俳句を作る		エ	ア・イ	オ	ウ	p.92	
沙石集		ア	イ	ア・イ・カ	ア	p.94-p.95	
説話(二)	唐物語	ア	イ	ア・イ	ア	p.96-p.97	
	宇治拾遺物語	ア	イ	ア・イ	ア	p.97-p.99	
	〔古典のしるべ〕物語の話型	エ	ア			p.100	
	大鏡	ア・イ	イ	ア・イ・ウ	ア	p.102-p.111	
日記	〔言語活動〕弓争い―社交から神事へ		エ	エ・キ	ア	p.114	
	蜻蛉日記	ア・イ	イ	イ・カ	ア	p.116-p.117	
	紫式部日記	ア	イ	イ・ウ	ア	p.118-p.119	
	更級日記	ア	イ	ア・イ	ア	p.120-p.124	
物語(三)	〔言語活動〕菅原孝標女と物語 〔言語活動〕平安時代の結婚		エ ア	キ イ・エ・オ・カ・キ	ア・オ	p.125 p.126	
	源氏物語	ア	イ	ア・イ	ア	p.128-p.135	
	〔古典のしるべ〕天皇・后妃の呼称		ア			p.140	
	無名草子	ア・ウ	イ	ア・イ	ア	p.142-p.145	
評論	〔言語活動〕読み比べる・紫式部日記 〔古典のしるべ〕清少納言と紫式部	ア	エ ア	キ	イ	p.146 p.147	
	無名抄	ア	イ	ア・イ・ウ	ア	p.148-p.149	
	玉勝間	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.150-p.151	
	〔言語活動〕本居宣長の「あげつらひ」	エ	エ	イ・ウ・エ・オ・カ・キ・ウ	イ・オ	p.152	
漢文編・ 第一部	故事・寓話	心に息づく漢詩の言葉		ア・エ		オ	p.154-p.158
		助長	ア	ア・イ・ウ	ア・ウ	ア	p.160
		嬰逆鱗	ア	ア・イ・ウ	ア・ウ	ア	p.161
		画竜点睛	ア	ア・イ・ウ	ア・ウ	ア	p.162
		推敲	ア	ア・イ・ウ	ア・ウ	ア	p.163
		朝三暮四	ア	ア・イ・ウ	ア・ウ	ア	p.164-p.165
		漢文を読むために1		イ			p.166-p.167
		〔言語活動〕名人の話	ア	ア	エ・キ・ク	ア	p.168
	漢詩の鑑賞	中国の詩	イ・エ	ア・イ	ア・イ・ウ・カ	ア	p.170-p.173
		日本の詩	イ・エ	ア・イ	ア・イ・ウ・カ	ア	p.174-p.175
		〔言語活動〕菅原道真と白居易 〔言語活動〕漢詩の字句や構成を考える	ア・エ イ・ウ・エ	ア・エ ア	イ・エ・キ・ク ア・イ	イ ウ	p.176-p.177 p.178-p.180
	不思議な世界	織女	ア・イ	ア・イ	ア・ウ・オ	ア	p.182-p.183
		売鬼	ア	ア・イ	ア・ウ・オ	ア	p.184-p.186
		買粉児	ア・イ	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.187-p.189
		〔古典のしるべ〕死者が生き返る話		エ			p.190
	諸家の思想	論語	ア・イ	ア・イ	ア・オ・カ	ア	p.192-p.195
		孟子	ア・イ	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.196-p.197
		老子	ア・イ	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.198-p.199
荘子		ア・イ	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.200-p.201	
韓非子		ア・イ	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.202-p.203	
〔言語活動〕名句・名言について調べる			ア・ウ	オ・ク	キ	p.204	
漢文編・ 第二部	逸話	不願後患	ア	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.206-p.207
		不若人有其宝	ア	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.208-p.209
		宋人有嫁子者	ア	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.210-p.211
		〔古典のしるべ〕螳螂のたとえ話		エ			p.212
	三国志の世界	水魚之交	ア	ア・イ	ア・ウ	ア	p.214-p.216
		赤壁之戦	ア	ア・イ	ア・ウ	ア	p.217-p.219
		死諸葛走生仲達	ア	ア・イ	ア・ウ	ア	p.220-p.221
	漢詩の鑑賞	漢文を読むために2		イ			p.224
		古体の詩	イ・エ	ア・イ	ア・イ・ウ・カ	ア	p.226-p.236
		〔言語活動〕『源氏物語』と『白氏文集』	ア・エ	ア・エ	エ・キ・ク	イ	p.237-p.238
	項羽と劉邦	鴻門之会	ア	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.240-p.249
		四面楚歌	ア	ア・イ	ア・ウ・カ	ア	p.250-p.255
〔言語活動〕劉邦の人物像			エ	エ・カ・ク	ア	p.258	
名家の文章	猫相乳	ア	ア・イ	ア・イ・ウ・カ	ア	p.260-p.261	
	臨江之樂	ア	ア・イ	ア・イ・ウ・カ	ア	p.262-p.263	
	売油翁	ア・エ	ア・イ	ア・イ・ウ・エ・オ	ア	p.264-p.265	
	〔古典のしるべ〕唐代の猫		エ			p.266	
					計		

音訓一覧表

通俊	埋まれ	衣	賜はり	失せ	誰	侍り	孫	入集	出で来	生野	公任	丹後守	寛仁	冷泉	道貞	天橋立	直衣	局	定頼	歌合	妻	保昌	和泉	清盛	平重盛	永曆	下野	通憲	御簾	給ひ	小松大臣	出だし	橘成季	六波羅二鷹左衛門	小式部内侍	成範	十訓抄	白妙	隠岐	藤原定家	後鳥羽	百敷	最果
みちとし	うづまれ	きぬ	たまはり	うせ	たれ	はべり	むまご	につしゅう	いでき	いくの	きんとう	たんごのかみ	かんにん	れいぜい	みちさだ	あまのはしだて	なほし	つぼね	さだより	うたあはせ	め	やすまさ	いづみ	きよもり	たいらのしげもり	えいりやく	しもつけ	みちのり	みす	たまひ	こまつのおとど	いだし	たちばなのなりすえ	ろくはらじろうさえもん	こしきぶのなしいし	しげのり	じつきんしょう	しろたへ	おき	ふじわらのさだいえ	ごとば	ももしき	さいはて
21	21	21	21	21	21	21	21	20	19	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	16	16	16	16	16	16	16	16	15	15	15	15	15	15	12	10	10	10	10	10
倒れ	煙	樋口富小路	西北	東南	四十	予	誰	土佐広周	朝	去年	椎柴	彼方	因香	帳	対かひて	望月	傾く	詞書	経時	安達景盛	北条	男	経営	城介義景	松下	相模守	希有	革堂	阿弥陀仏	住吉	延暦寺	狩野探幽	堀池	榎の木	僧正	公世	長明	寄人	建暦	卜部兼好	鴨長明	徒然草	源俊頼
たふれ	けぶり	ひぐちとみのこうち	いぬぬ	たつみ	よそぢ	われ	た	ときひろかね	あした	こぞ	しひしば	かなた	よるか	とぼり	むかひて	もちづき	かたぶく	ことばがき	つねとき	あだちかげもり	ほうじょう	をのこ	けいめい	しやうのすけよしかげ	まつしたの	さがみのかみ	けう	こうどう	あみだぶつ	すみよし	えんりやくじ	かのうたんゆう	ほりけ	えのき	そうじやう	きんよ	ながあきら	よりゆうど	けんりやく	うらべかねよし	かものちようめい	つれづれぐさ	みなもとのとしより
35	34	34	34	34	34	34	33	32	32	32	31	30	30	30	30	30	30	30	28	28	28	28	28	28	28	28	27	26	26	25	24	24	24	24	24	23	23	23	23	23	23	21	
貞観	寮	睦月	御髪	御酒	右馬頭	親王	水無瀬	基経	国経	高子	順子	邸	築地	築き	築地	童	東	源融	信夫	陸奥	狩衣	垣間見	領る	春日	平城	初冠	帝	翁	在原業平	伊勢	荷前	御仏名	七夕	六月	県召	干支	御精進	候ふ	后	来	造	公卿	七珍万宝
じようがん	つかさ	むつき	みぐし	みき	うまのかみ	みこ	みなせ	もとつね	くにつね	たかいこ	のぶこ	やしき	ついち	つき	ついひぢ	わらは	ひむがし	みなもとのとおる	しのぶ	むつ	かりぎぬ	かいまみ	しる	かすが	なら	うひかふぶり	みかど	おきな	ありわらのなりひら	いせ	のさき	おぶつみよう	たなばた	あがためし	えと	みさうじ	さぶらふ	きさき	こ	みやつこ	くぎやう	しつちんまんぼう	
44	44	44	44	44	44	44	44	43	43	42	42	42	42	42	42	42	42	40	40	40	40	40	40	40	40	40	39	39	39	39	38	38	38	38	38	38	38	37	37	37	35	35	

音訓一覧表

御室	みむろ	遊子	いうし	馬手	めて	85
候ひて	さぶらひて	表着	うわぎ	死途	しで	75
平城	へいぜい	尽く	ことごとく	侍	さぶらい	77
仁明	にんみよう	魏宮	ぎきう	俊成	としなり	77
淳和	じゅんな	猶ほ	なほ	今	ま	77
冬嗣	ふゆつぐ	北家	ほつけ	御目	おめ	77
良房	よしふさ	道隆	みちたか	範頼	のりより	78
明子	あきらけいこ	伊周	これちか	頼政	よりまさ	78
長良	ながら	隆家	たかいえ	元暦	げんりやく	80
皮衣	かはぎぬ	路子	みちこ	下関	しものせき	80
阿倍	あべ	信濃前司行長	しなののせんじゆきな	阿弥陀	あみだ	80
唐土	もろこし	祇園精舎	ぎをんしやうじや	般若	ほんにや	80
請じ	しやうじ	沙羅	しやら	大伴家持	おおとものやかもち	81
洒落	しやれ	忠度	ことわり	旋頭歌	せどうか	81
猛く	たけく	落人	ただのり	枕詞	まくらことば	81
酔ひ	ゑひ	別	おちうと	序詞	じよことば	81
外	と	別	べち	友則	ともりのり	81
本意	ほい	義仲	よしなか	凡河内躬恒	おおしこうちのみつね	81
塗籠	ぬりごめ	侯ふ	ざうらふ	壬生忠岑	みぶのただみね	81
御衣	みぞ	甲	かぶと	部立	ぶだて	81
六衛	ろくゑ	暮べ	ゆふべ	通具	みちとも	81
蔵人	くらうど	近江	おうみ	家隆	いえたか	81
近衛	このえ	忠盛	ただもり	雅経	まさつね	81
三位	さんみ	経盛	つねもり	蒲生野	かまふの	82
思す	おぼす	教盛	のりもり	遊獵	みかり	82
能登	のと	通盛	みちもり	額田王	ぬかたのおほきみ	82
枕草子	まくらのそうし	教経	のりつね	標野	しめの	82
則光	のりみつ	重盛	しげもり	大海人皇子	おおあまのみこ	82
御格子	みかうし	宗盛	むねもり	御	み	82
看る	みる	知盛	ともり	紫草	むらさき	82
愛敬	あいぎやう	重衡	しげひら	妹	いも	82
梨花	りくわ	知度	ともりのり	山上憶良臣	やまのうへのおくらのおみ	82
網代	あじろ	直垂	ひたたれ	罷る	まかる	82
乳児	ちご	太刀	たち	山部宿禰	やまべのすくね	82
司	つかさ	柄刀	なぎなた	吉野	よしの	82
前駆	さき	長刀	つか	象山	きさやま	82
上達部	かんだちめ	退いた	のいた	際	ま	82
下衆	げす	義経	よしたも	木末	こぬれ	82
眠たき	ねぶたき	安芸郷	あきのがう	大宰帥	だざいのそち	82
寝	ぬ	安芸郷	あきのがう	大伴旅人	おおとものたびと	82
長女	をさめ	実康	さねやす	守	かみ	82
長押	なげし	実光	さねみつ	聖武	しようむ	82
響	ひびき	弟	おとと	朝臣	あそみ	83
都良香	みやこのよし	弓手	ゆんで	石見	いはみ	83



音訓一覧表

幾 能く 若し 然れども 騎る 可き 為る 夫れ 逆鱗 則ち 視れ 往き 病れたり 不る 六朝 今宵 如何 子 束ぬれ 安藤信廣 輩 愛でる 違へ 詞 俊頼 随ち 承保 長保 土佐光起 本居宣長 建保 御門 団扇 僧都 按察使 髪ざし 狩野永徳 襲 伏籠 犬君 妃 高麗人 淑景舎 皇女	みこ しげいしや こまうど きさき いぬき ふせご かさね かのうえいとく かんざし あぜち そうず うちわ みかど けんぼう もとおりのりなが とさみつおき ちようほう じようほう おち としより ことば たがへ めでる やから あんどうのぶひろ つかぬれ きみ いか こよい りくちよう ざる つかれたり ゆき みれ すなはち げきりん それ	161 161 161 161 161 161 161 161 160 160 160 160 158 155 155 155 154 154 152 152 151 150 148 147 147 147 145 141 141 140 137 135 134 134 133 132 132 132 131 131 130 130	看 菅原道真	み すがはらのみちざね	174 174 173 173 172 172 172 171 171 170 170 170 170 170 170 168 167 167 165 164 164 164 164 164 163 163 163 163 162 162 162 162 162 162 162 162 162 162	略 将た 便ち 何如 遁ひに 太だ 宛 語げ 耳 縁りて 是に 為に 令めよ 還り 遣る 亡する 随ふ 敵 居り 少くして 停む 苦だ 沙 紅い 晩 停めて 霜葉 承け 掃ふ 平仄 処 寧き 泰く 睡り 偶 常規 残なはるる 少に 去け 閑かに 晋帥 何為れぞ 逐はん 好し	ほぼ はた すなはち いかん たがひに はなはだ ゑん つげ のみ よりて ここに ために しめよ かへり やる したがる ぼ をり わかくして とどむ はなはだ すな あかい くれ とめて さうえふ うけ はらふ ひようそく ところ やすき やすく ねむり たまたま つねのり まれに ゆけ しづかに ときのり なんすれぞ おはん よし	185 184 184 184 184 184 184 183 183 183 183 183 183 182 182 182 182 182 180 180 180 179 179 179 179 179 178 178 177 177 177 176 175 175 175 175 174 174 174
--	---	--	-----------	----------------	--	--	--	---

音訓一覧表

如き	ごとき	185	悪む	にくむ	197	自づから	おのづから	215
是く	かく	185	悪在くんぞ	いづくんぞ	197	挟み	さしはさみ	215
畏忌	みき	185	象り	かたどり	197	付く	なつく	216
著け	つけ	185	処り	をり	198	援け	たすけ	216
執らふ	とらふ	185	相たり	しやうたり	200	遺り	おくり	217
索むる	もとむる	185	見はん	あはん	200	張昭	ちやうせう	217
径ちに	ただちに	185	嚇さん	をどさん	201	逆へ	むかへ	218
止だ	ただ	187	邪	か	201	遇ふ	あふ	218
漸く	やうやく	187	昔者	むかし	201	方に	まさに	218
敢へて	あへて	187	諭しみ	たのしみ	201	公覆	こうふ	218
恒に	つねに	187	与	かな	201	予め	あらかじめ	219
観る	みる	187	与	かな	201	詐り	いつはり	219
到る	いたる	188	自め	はじめ	202	降らん	くだらん	219
悦び	よろこび	188	荒み	すさみ	202	衆し	おほし	219
把り	とり	188	者	ば	202	等	ら	219
所以	ゆゑん	188	難る	はばかる	202	壊れ	やぶれ	219
就す	なす	188	故き	ふるき	202	走げ	にげ	219
発き	ひらき	188	唯だ	ただ	203	数	しばしば	220
児	こ	188	宜しき	よろしき	203	興き	おき	220
遍く	あまねく	188	維ぐ	つなぐ	203	夜	よは	220
次る	いたる	188	易はら	かはら	203	親ら	みづから	220
咽し	えつし	188	劉向	りゆうきやう	205	覧る	みる	220
陳ぶ	のぶ	188	伐たんと	うたんと	206	病	やまひ	221
黒田真美子	くろだまみこ	190	懷き	いだき	206	篤し	あつし	221
仲尼	ちゆうじ	191	丸	たま	206	墜つ	おつ	221
訟むる	せむる	192	操りて	とりて	206	幾なら	いくばくなら	221
扱び	えらび	192	者	こと	206	卒す	しゆつす	221
者	は	193	樹	き	206	百姓	ひやくせい	221
憾み	うらみ	194	患ひ	うれひ	207	奔り	はしり	221
伐る	ほこる	194	若か	しか	208	若く	ごとく	221
荷ふ	になふ	194	諸	これ	208	料る	はかる	221
植て	たて	194	喪ふ	うしなふ	208	能は	あたは	221
止め	とどめ	195	和氏	くわし	209	寧ろ	むしろ	224
見え	まみえ	195	弥	いよいよ	209	安くんぞ	いづくんぞ	224
反りて	かへりて	195	私かに	ひそかに	210	樂府	がふ	225
行れ	され	195	易し	やすし	210	悠悠	いういう	226
如	いかん	195	窃み	ぬすみ	210	寧ぞ	たとひ	226
舎て	すて	196	勃ら	もたら	210	挑たり	たうたり	226
由ら	よら	196	和田武司	わだたけし	212	釜	ふ	227
哀しい	かなしい	196	訪ふ	もうしん	214	煎る	にる	227
対へ	こたへ	196	識る	しる	215			227
食ましむる	はましむる	197						

音訓一覧表

行	本紀	屏風	後涼殿	翼	魂	四、五人	前栽	命婦	期	会ず	将つて	両つ	聞道く	参差	貌	膚	電	教む	曾て	与共にせん	挑げ	梨	階	未央	信せ	空し	旋り	委て	動し	足か	土	列ぬ	罷み	粧ひ	度る	扶け	賜ふ	側ら	御宇	意	線	当に…し	歎び
ゆくゆく	ほんぎ	びようぶ	こうろうでん	はね	たま	よたりにいつたり	せんざい	みやうぶ	とき	かならず	もつて	ふたつ	きくならく	しんし	かんばせ	はだ	いなづま	しむ	かつて	ともにせん	かかげ	り	きざはし	びあう	まかせ	むなし	めぐり	すて	どよもし	あか	くに	つらぬ	やみ	よそほひ	わたる	たすけ	たまふ	かたはら	ぎよう	こころ	いと	まさに…べし	よろこび
240	239	238	238	238	238	238	238	238	236	236	235	235	235	234	234	234	234	234	234	234	233	233	233	233	233	233	232	231	231	231	231	231	231	230	230	230	230	230	229	229	228	228	
中つる	担	積み	益	良に	畜ふ	方たり	六一居士	猫相乳	宦官	頭	購ふ	指し	固より	亡ぼす	困しむ	卒に	泣	蓋ふ	為り	駿馬	罷れ	間び	度り	如今	奈何	如き	窃かに	故らに	覆せ	披き	側て	内れ	虜	且に…	不者ずんば	環	前み	亜父	今者	意は	美姫	虞	従弟
あつる	に	おき	ますます	まことに	やしなふ	あたり	りくいっこじ	べうさうにゆう	かんがん	かうべ	あがなふ	しめし	もとより	ほろぼす	くるしむ	つひに	なみだ	おほふ	つくり	しゆんめ	つかれ	しのび	はかり	いま	いかん	ゆき	ひそかに	ことさらに	ふせ	ひらき	そばだて	いれ	とりこ	まさに…す	しからずんば	わ	すすみ	あほ	いま	おもは	びき	ぐ	いとこ
264	264	264	262	262	261	260	259	259	256	255	255	254	253	253	253	253	252	252	252	252	250	248	248	247	247	246	246	246	245	245	245	244	244	244	243	243	243	243	242	241	240	240	
天和	元和	観阿弥	足利	世阿弥	良基	北畠親房	神皇正統記	十六夜	曆応	連歌	新統古今和歌集	信実	仁治	文暦	貞永	建仁	保元	頭輔	打聞	讚岐典侍	狭衣	明衡	仁平	天仁	将門	和泉式部	為憲	源順	良岑安世	景戒	天慶	承和	弘仁	出雲	舍人親王	播磨国	太安万侶	応仁	雅	所謂	湿は	徐ろに	微し
てんな	げんな	かんあみ	あしかが	ぜあみ	よりもと	きたばたけちかふさ	じんのうしょうとうき	いざよい	りやくおう	れんが	しんしよくきんわかしゆう	のぶざね	にんじ	ぶんにやく	じようえい	けん	ほうげん	あきすけ	うちぎき	さぬきのすけ	さごろも	あきひら	にんびよう	てんにん	まさかど	いずみしきぶ	ため	みなものしたごう	よしみねのやすよ	きようかい	てんぎよう	じようわ	こうにん	いずも	とねりしんのう	はりまのくに	おおやすまろ	おうにん	みやび	いはゆる	うるほは	おもむろに	すこし
274	274	273	273	273	273	273	273	273	273	272	272	272	272	272	272	271	271	271	271	271	271	271	271	270	270	270	270	270	270	270	270	269	269	269	269	268	268	265	265	265	264	264	

音訓一覧表

漢字	音訓	頁
井原西鶴	いはらさいかく	274
景清	かげきよ	274
日本永代蔵	にっぽんえいたいぐら	274
三冊子	さんぞうし	274
服部土芳	はつとりどほう	274
氣質	かたぎ	274
国性爺合戦	こくせんやかつせん	274
貞成	さだしげ	274
手習鑑	てならいかがみ	275
呉陵軒可有	ごりようけんあるべし	275
江戸生艶氣樺焼	えどうまれうわきのかばやき	275
花摘	はなつみ	275
四谷	よつや	275
春色梅児誉美	しゅんしよくうめぐよみ	275
為永春水	ためながしゅんすい	275
黙阿弥	もくあみ	275
戯作	げさく	275
遷す	うつす	276
句践	こうせん	276
呂不韋	りよふい	276
堂々	だうだう	280
寝ぬ	いぬ	285
且	しや	299

# 出典一覧表

〔国語教材〕

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
10～12	百人一首という感情	国語教材	百人一首という感情	291～295	最果夕ヒ	リトルモア	2018年	
16～17	十訓抄	国語教材	新編日本古典文学全集51	67～68	未詳	小学館	1997年	
18～19	古今著聞集	国語教材	日本古典文学大系84	168	橘成季	岩波書店	1966年	
21	古今著聞集	国語教材	日本古典文学大系84	160～161	橘成季	岩波書店	1966年	
21	後拾遺和歌集	国語教材	新日本古典文学大系8	186	和泉式部	岩波書店	1994年	
21	金葉和歌集	国語教材	新日本古典文学大系9	183	和泉式部	岩波書店	1989年	
24～31	徒然草	国語教材	新版 徒然草(角川ソフィア文庫)	14、54、92～93、175～176、 134～135	兼好法師	KADOKAWA	2015年	
32～35	方丈記	国語教材	日本古典文学大系30	23～25	鴨長明	岩波書店	1957年	
40～45	伊勢物語	国語教材	新日本古典文学大系17	79～80、83～84、160～161	未詳	岩波書店	1997年	
46～53	竹取物語	国語教材	新日本古典文学大系17	3、29～32、69～74	未詳	岩波書店	1997年	
58～65	枕草子	国語教材	新日本古典文学大系25	321、50～52、28、30～31、 331～332	清少納言	岩波書店	1991年	
68～75	平家物語	国語教材	新日本古典文学大系44	5	未詳	岩波書店	1991年	
		国語教材	新日本古典文学大系45	48～50、298～300	未詳	岩波書店	1993年	
82	あかねさす	国語教材	新編日本古典文学全集6	36～37	額田王	小学館	1994年	
82	紫草の	国語教材	新編日本古典文学全集6	37	大海人皇子	小学館	1994年	
82	憶良らは	国語教材	新編日本古典文学全集6	206	山上憶良	小学館	1994年	
82	み吉野の	国語教材	新編日本古典文学全集7	113	山部赤人	小学館	1995年	
83	石見の海	国語教材	新編日本古典文学全集6	100～101	柿本人麻呂	小学館	1994年	
83	石見のや・小竹の葉は	国語教材	新編日本古典文学全集6	101～102	柿本人麻呂	小学館	1994年	
84	春の野に	国語教材	新編日本古典文学全集9	363	大伴家持	小学館	1996年	
84	信濃道は	国語教材	新編日本古典文学全集8	472	(東歌)	小学館	1995年	
84	父母が	国語教材	新編日本古典文学全集9	393	(防人歌)	小学館	1996年	
85	やまと歌は	国語教材	新編日本古典文学全集11	17	紀貫之	小学館	1994年	
86	春の夜の	国語教材	新編日本古典文学全集11	44	凡河内躬恒	小学館	1994年	
86	蓮葉の	国語教材	新編日本古典文学全集11	87	僧正遍昭	小学館	1994年	
86	ひさかたの	国語教材	新編日本古典文学全集11	97	壬生忠岑	小学館	1994年	
86	冬ながら	国語教材	新編日本古典文学全集11	143	清原深養父	小学館	1994年	
86	むすぶ手の	国語教材	新編日本古典文学全集11	171	紀貫之	小学館	1994年	
87	ほととぎす	国語教材	新編日本古典文学全集11	196	よみ人知らず	小学館	1994年	
87	色見えて	国語教材	新編日本古典文学全集11	303	小野小町	小学館	1994年	
88	春の夜の	国語教材	新編日本古典文学全集43	32	藤原定家	小学館	1995年	
88	秋更けぬ	国語教材	新編日本古典文学全集43	157	後鳥羽院	小学館	1995年	
88	明けばまた	国語教材	新編日本古典文学全集43	279	藤原家隆	小学館	1995年	
88	玉の緒よ	国語教材	新編日本古典文学全集43	305	式子内親王	小学館	1995年	
89	下燃えに	国語教材	新編日本古典文学全集43	318	藤原俊成女	小学館	1995年	
89	吉野山	国語教材	新編日本古典文学全集43	469	西行法師	小学館	1995年	
90	雪月花	国語教材	日本古典文学大系92	37	松永貞徳	岩波書店	1964年	
90	海は少し	国語教材	日本古典文学全集42	84	西山宗因	小学館	1972年	

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
90	奈良七重	国語教材	日本古典文学大系45	49	松尾芭蕉	岩波書店	1962年	
90	応々と	国語教材	日本古典文学大系92	100	向井去来	岩波書店	1964年	
91	初恋や	国語教材	古典俳文学大系13	399	炭太祇	集英社	1970年	
91	愁ひつつ	国語教材	日本古典文学大系58	128	与謝蕪村	岩波書店	1959年	
91	月や霰	国語教材	日本古典文学全集42	326	上田秋成	小学館	1972年	
91	仰のけに	国語教材	日本古典文学全集42	430	小林一茶	小学館	1972年	
94～95	沙石集	国語教材	日本古典文学大系85	346	無住	岩波書店	1966年	
96	唐物語	国語教材	唐物語(講談社学術文庫)	101～102	未詳	講談社	2003年	
98～99	宇治拾遺物語	国語教材	新日本古典文学大系42	325～326	未詳	岩波書店	1990年	
102～111	大鏡	国語教材	新編日本古典文学全集34	13～15、324～326、115～116、318～321	未詳	小学館	1996年	
116～117	蜻蛉日記	国語教材	新編日本古典文学全集13	99～101	藤原道綱母	小学館	1995年	
118～119	紫式部日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	208～209	紫式部	小学館	1994年	
120～124	更級日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	279～280、297～299	菅原孝標女	小学館	1994年	
128～135	源氏物語	国語教材	新編日本古典文学全集20	17～20、206～208	紫式部	小学館	1994年	
142～145	無名草子	国語教材	新編日本古典文学全集40	266～268、276～277	未詳	小学館	1999年	
146	紫式部日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	202	紫式部	小学館	1994年	
148～149	無名抄	国語教材	無名抄(角川ソフィア文庫)	76～78	鴨長明	KADOKAWA	2013年	
150～151	玉勝間	国語教材	日本思想大系40	135～136	本居宣長	岩波書店	1978年	
154～158	心に息づく漢詩の言葉	国語教材	漢詩入門はじめのはじめ(初版第1刷)	1～5	安藤信廣	東京美術	1989年	
160	助長	国語教材	孟子(十三経注疏)(第3刷)	第8冊 55	孟軻	芸文印書館	1965年	
161	嬰逆鱗	国語教材	韓非子集釈(初版)	巻4 223～224	韓非	上海人民出版社	1974年	
162	画竜点睛	国語教材	歴代名画記(増補津逮秘書)(初版)	第5冊 4197	張彦遠	中文出版社	1980年	
163	推敲	国語教材	唐詩紀事(初版)	巻40 613	計有功	中華書局	1972年	
164～165	朝三暮四	国語教材	列子(漢文大系本)(増補版第3刷)	第13巻 29	列禦寇	富山房	1978年	
170	鹿柴	国語教材	王右丞集(四部叢刊本)(初版)	第33冊 29	王維	商務印書館	1979年	
170	絶句	国語教材	杜工部集(四部叢刊本)(初版)	第32冊 70	杜甫	商務印書館	1979年	
171	峨眉山月歌	国語教材	李太白集(四部叢刊本)(初版)	第32冊 156	李白	商務印書館	1979年	
171	春夜	国語教材	蘇軾詩集(中国古典文学基本叢書)(初版)	巻48 2592	蘇軾	中華書局	1982年	
172	除夜寄弟妹	国語教材	白氏文集歌詩索引(初版)	下冊 150	白居易	同朋舎出版	1989年	
172～173	遊山西村	国語教材	陸放翁詩集(四部叢刊本)(初版)	第59冊 18	陸游	商務印書館	1979年	
174	不出門	国語教材	日本古典文学大系72(第6刷)	481～482	菅原道真	岩波書店	1974年	
174～175	冬夜読書	国語教材	江戸詩人選集第4巻(初版)	81～82	菅茶山	岩波書店	1990年	
175	送夏目漱石之伊予	国語教材	子規全集第8巻(初版)	211	正岡子規	講談社	1976年	
177	香炉峰下新卜山居 草堂初成偶題東壁	国語教材	白氏文集(四部叢刊本)(初版)	第36冊	白居易	商務印書館	1979年	
182～183	織女	国語教材	搜神記(初版)	巻1 14～15	干宝	中華書局	1979年	
184～186	壳鬼	国語教材	搜神記(初版)	巻16 199	干宝	中華書局	1979年	
187～189	買粉児	国語教材	古小説鉤沈	254	魯迅	人民文学出版社	1951年	
192～195	論語	国語教材	論語(十三経注疏)(3版)	第10冊	孔子	芸文印書館	1965年	
196～197	孟子	国語教材	孟子(十三経注疏)(初版)	第8冊	孟軻	中文出版社	1972年	
198～199	老子	国語教材	老子(漢文大系本)(増補版第6刷)	第9巻 27、13	老子	富山房	1988年	

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
200～201	莊子	国語教材	莊子(漢文大系本)(増補版第6刷)	第9巻	莊周	富山房	1988年	
202～203	韓非子	国語教材	韓非子(漢文大系本)(増補3版)	第8巻 16～17	韓非	富山房	1978年	
206～207	不顧後患	国語教材	説苑(増訂漢魏叢書)(初版)	第34冊 925	劉向	大化書局	1989年	
208～209	不若人有其宝	国語教材	新序(増訂漢魏叢書)(初版)	第34冊 825	劉向	大化書局	1989年	
210～211	宋人有嫁子者	国語教材	淮南子(漢文大系本)(増補初版)	第20巻 36～37	劉安	富山房	1977年	
214～216	水魚之交	国語教材	十八史略(漢文大系本)(増補版第5刷)	第5巻 56～57	曾先之	富山房	1990年	
217～219	赤壁之戦	国語教材	十八史略(漢文大系本)(増補版第5刷)	第5巻 57～58	曾先之	富山房	1990年	
220～221	死諸葛走生仲達	国語教材	十八史略(漢文大系本)(増補版第5刷)	第5巻 69～70	曾先之	富山房	1990年	
226	子衿	国語教材	詩經(十三經注疏)(3版)	第3冊 179～180	孔子	芸文印書館	1965年	
227	七步詩	国語教材	世説新語(四部叢刊本)(第2版)	41	劉義慶	商務印書館	1967年	
228	雑詩	国語教材	箋註陶淵明集(四部叢刊本)(第2版)	40	陶潜	商務印書館	1967年	
229	遊子吟	国語教材	孟東野詩集(四部叢刊本)(第2版)	9	孟郊	商務印書館	1967年	
230～236	長恨歌	国語教材	白氏文集(四部叢刊本)(初版)	第36冊 63～64	白居易	商務印書館	1979年	
238	源氏物語	国語教材	新編日本古典文学全集20	33～35	紫式部	小学館	1994年	
240～249	鴻門之会	国語教材	史記(史記会注考証)(初版)	巻7 26～35	司馬遷	芸文印書館	1972年	
250～255	四面楚歌	国語教材	史記(史記会注考証)(初版)	巻7 68～73	司馬遷	芸文印書館	1972年	
260～261	猫相乳	国語教材	昌黎先生文集(四部叢刊本)(初版)	第34冊 116	韓愈	商務印書館	1979年	
262～263	臨江之麋	国語教材	柳先生文集(四部叢刊本)(初版)	第35冊 103	柳宗元	商務印書館	1979年	
264～265	売油翁	国語教材	欧陽文忠公文集(四部叢刊本)(初版)	第45冊 980～981	欧陽脩	商務印書館	1979年	

※上記のもの以外については、編集委員による書き下ろしである。

〔図・地図〕

※自社で作成。

〔写真〕

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
見返①	『新編日本古典文学全集』	写真	『新編日本古典文学全集12 竹取物語』	表紙	片桐洋一	小学館	1994年	自社で撮影
見返①	『新釈漢文大系』	写真	『新釈漢文大系1 論語』	表紙	吉田賢抗	明治書院	2021年	自社で撮影
見返①	『ビギナーズ・クラシックス』	写真	『老子・荘子 ビギナーズ・クラシックス 中国の古典』	表紙	谷口広樹	KADOKAWA	2004年	自社で撮影
見返①	『池澤夏樹＝個人編集日本文学全集』	写真	『池澤夏樹＝個人編集日本文学全集4 源氏物語上』	表紙	角田光代	河出書房新社	2017年	自社で撮影
見返①	『中国古典文学大系』	写真	『中国古典文学大系1 書経・易経』	表紙	赤塚忠 訳	平凡社	1972年	自社で撮影
見返①	『ちんちん千鳥のなく声は』	写真	『ちんちん千鳥のなく声は』	表紙	山口仲美	講談社	1989年	自社で撮影
見返①	『和歌とは何か』	写真	『和歌とは何か』	表紙	渡部泰明	岩波書店	2009年	自社で撮影
見返①	『徒然草をよみなおす』	写真	『徒然草をよみなおす』	表紙	小川剛生	筑摩書房	2020年	自社で撮影
見返①	『杜甫』	写真	『杜甫』	表紙	川合康三	岩波書店	2012年	自社で撮影
見返②	『方丈記私記』	写真	『方丈記私記』	表紙	堀田善衛	筑摩書房	1988年	自社で撮影
見返②	『新装版 風月無尽 中国の古典と自然』	写真	『新装版 風月無尽 中国の古典と自然』	表紙	前野直彬	東京大学出版会	2015年	自社で撮影
見返②	『あさきゆめみし』	写真	『あさきゆめみし』	表紙	大和和紀	講談社	2008年	自社で撮影
見返②	『キングダム』	写真	『キングダム』	表紙	原泰久	集英社	2006年	自社で撮影
見返②	『小説伊勢物語 業平』	写真	『小説伊勢物語 業平』	表紙	高樹のぶ子	日本経済新聞出版	2020年	自社で撮影
見返②	『項羽と劉邦』	写真	『項羽と劉邦(上)』	表紙	司馬遼太郎	新潮社	2015年	自社で撮影
見返②	『李陵・山月記 弟子・名人伝』	写真	『李陵・山月記 弟子・名人伝』	表紙	中島敦	KADOKAWA	1968年	自社で撮影
見返②	『新潮古典文学アルバム』	写真	『新潮古典文学アルバム7 枕草子・紫式部日記』	表紙	鈴木日出男	新潮社	1990年	自社で撮影
見返②	『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』	写真	『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』	表紙	ハルオ・シラネ	KADOKAWA	2020年	自社で撮影
見返②	『諸子百家』	写真	『諸子百家』	表紙	湯浅邦弘	中央公論新社	2014年	自社で撮影
見返②	『科挙 中国の試験地獄』	写真	『科挙 中国の試験地獄』	表紙	宮崎市定	中央公論新社	1963年	自社で撮影
見返③	モンシロチョウ	写真						PIXTA 78612304
見返③	雪山の登山道	写真						PIXTA 100346972
見返③	天の川 乗鞍高原	写真						PIXTA 62999175
見返③	函谷関	写真						PIXTA 13710574
11	(ノキシノブ)	写真						PIXTA 9084072
19	『十訓抄』版本の挿絵	写真		巻三			1721年	国立公文書館
19	(天橋立)	写真						PIXTA 41057825
24	兼好法師(伝狩野探幽筆)	写真			伝狩野探幽			神奈川県立金沢文庫
25	『徒然草画帖』(住吉具慶筆)	写真			住吉具慶			東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ
26	奈良絵本『徒然草』	写真						名古屋市蓬左文庫
29	奈良絵本『徒然草』	写真						名古屋市蓬左文庫
32	鴨長明(伝土佐広周筆)	写真			伝土佐広周			神宮文庫
33	大福光寺本『方丈記』	写真						大福光寺
40	初冠(奈良絵本『伊勢物語』)	写真	奈良絵本『伊勢物語』					『日本古典籍データセット』(国文学研究資料館蔵)
42	通い路の開守(模本『伊勢物語絵巻』)	写真	模本『伊勢物語絵巻』					東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ
44	小野の雪(模本『伊勢物語絵巻』)	写真	模本『伊勢物語絵巻』					東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ
46	五人の貴公子たちの求婚(『竹取物語絵巻』)	写真	『竹取物語絵巻』					国立国会図書館デジタル化資料
48	火鼠の皮衣(『竹取物語絵巻』)	写真	『竹取物語絵巻』					国立国会図書館デジタル化資料
49	月を見て嘆くかぐや姫(『竹取物語絵巻』)	写真	『竹取物語絵巻』					国立国会図書館デジタル化資料
56	『平安女子の楽しい！生活』	写真	『平安女子の楽しい！生活』	表紙	川村裕子	岩波書店	2014年	自社で撮影
59	梅	写真						PIXTA 46652602
59	桜	写真						PIXTA 54974908
59	藤	写真						PIXTA 30824691
59	橘	写真						フォトオリジナル 4165735
59	ほととぎす	写真						PIXTA 58441328
60	梨	写真						PIXTA 7140369
60	桐	写真						PIXTA 38332964
60	棟	写真						PIXTA 17605054
61	「桐鳳凰図」	写真	友禅染掛幅 桐鳳凰図					ColBase
62	網代(『石山縁起』)	写真	『石山縁起』					国立国会図書館デジタル化資料
70	忠度の都落ち(『平家物語絵巻』)	写真	『平家物語絵巻』	巻七				林原美術館/DNPアートコミュニケーションズ
72	義経、舟を飛び移る(『源平合戦図屏風』)	写真	『源平合戦図屏風』					ColBase
74	能登殿の最期(『平家物語絵巻』)	写真	『平家物語絵巻』	巻十一				林原美術館/DNPアートコミュニケーションズ
75	平家琵琶	写真						赤間神宮
77	天草版平家物語	写真				大英図書館		大英図書館
78	俱利伽羅の戦い	写真	奈良絵本『平家物語絵巻』	巻七				明星大学
78	屋島の戦い	写真	奈良絵本『平家物語絵巻』	巻十一				明星大学

申請図書		出典					備考	
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者		発行年次等
78	宇治平等院の戦い	写真	奈良絵本『平家物語』	卷四				明星大学
78	壇ノ浦の戦い	写真	奈良絵本『平家物語絵巻』	卷十一				明星大学
79	源頼朝	写真	「源頼朝木像」					甲斐善光寺
79	平清盛	写真	「平清盛公坐像」					六波羅羅寺
79	源義経	写真	「源義経画像」					中尊寺
80	ヘイケガニ	写真						アフロ
82	紫草	写真						PIXTA
83	笹	写真						PIXTA
85	古今和歌集仮名序(藤原定実筆)	写真			藤原定実			大倉集古館
86	桂	写真						PIXTA
87	(あやめぐさ)	写真						PIXTA
89	吉野山	写真						PIXTA
90	卯木(卯の花)	写真						PIXTA
90	八重桜	写真						PIXTA
100	亀を釣る浦島太郎(奈良絵本『うらしま』)	写真						多久市郷土資料館
93	いばら	写真						PIXTA
93	(灯籠)	写真						PIXTA
103	雲林院の菩提講(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館
104	弓争い(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館
106	「大堰川遊覧図屏風」(浮田一蕙筆)	写真			浮田一蕙			御寺泉涌寺
110	(高御座)	写真			岡本茂男			宮内庁京都事務所・岡本写真工房
113	紫式部日記絵巻	写真						ColBase
121	「更級日記」(佐多芳郎筆)	写真			佐多芳郎			大佛次郎記念館・佐多匡子
122	広隆寺	写真						PIXTA
122	(櫃)	写真	唐櫃					ColBase
131	高麗人の予言(『源氏物語絵色紙帖』)	写真	『源氏物語絵色紙帖』		土佐光吉			ColBase
133	若紫(狩野永徳筆『源氏物語図屏風』)	写真	『源氏物語図屏風』		狩野永徳			皇居三の丸尚蔵館
136	夕顔	写真						国文学研究資料館
136	藤壺の宮	写真						国文学研究資料館
136	光源氏	写真						国文学研究資料館
136	朧月夜	写真						国文学研究資料館
137	葵の上	写真						国文学研究資料館
137	明石の君	写真						国文学研究資料館
137	紫の上	写真						国文学研究資料館
137	六条の御息所	写真						国文学研究資料館
138	柏木	写真						国文学研究資料館
138	女三の宮	写真						国文学研究資料館
138	光源氏	写真						国文学研究資料館
138	落葉の宮	写真						国文学研究資料館
138	雲居の雁	写真						国文学研究資料館
138	夕霧	写真						国文学研究資料館
138	紫の上	写真						国文学研究資料館
139	大君	写真						国文学研究資料館
139	中の君	写真						国文学研究資料館
139	匂宮	写真						国文学研究資料館
139	薫	写真						国文学研究資料館
139	浮舟	写真						国文学研究資料館
145	「清少納言図」(土佐光起筆)	写真			土佐光起			Colbase
145	「紫式部図」(土佐光起筆)	写真			土佐光起			石山寺
148	鶉図(徽宗筆・模写)	写真			徽宗(模写)			ColBase
150	本居宣長自画像	写真	本居宣長六十一歳自画像					本居宣長記念館
154	(オリオン座の三つ星)	写真						PIXTA
164	『連環画』より	写真	『中国の故事名言』	337		小学館	1983年	自社で撮影
171	峨眉山	写真						PIXTA
190	『中国古典小説選』	写真	『中国古典小説選』	表紙	竹田晃・黒田真美子編	明治書院	2007年	自社で撮影
193	「孔子杏壇講学図」	写真						CPC
198	「老子」(横山大観筆)	写真			横山大観			熊本県立美術館
201	『胡蝶夢木彫根付』	写真						Colbase
212	『マンガ 老荘の思想』	写真	『マンガ老荘の思想』	表紙	蔡志忠・和田武司・野末陳平	講談社	2021年	自社で撮影
215	草廬三顧(下村観山筆)	写真			下村観山			駿府博物館
218	(赤壁の戦い)	写真	『中華古文明大図集』	5-144		人民日報出版社	1992年	CPC

申請図書			出典				備考	
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
223	曹操	写真						国立公文書館
223	孫権	写真						国立公文書館
223	劉備	写真						CPC
227	曹植「七歩の詩」(「図像三国志」)	写真						CPC
228	陶潜	写真						CPC
232	蜀の栈道	写真						CPC
243	(玉珎)	写真						ユニフोटプレス
251	「項羽」(安田軻彦筆)	写真			安田軻彦			東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ
256	司馬遷	写真						国立公文書館
257	劉邦	写真						国立公文書館
257	項羽	写真						国立公文書館
260	韓愈	写真						ユニフोटプレス
262	柳宗元	写真						アフロ
263	藥(『和漢三才図絵』)	写真	『和漢三才図絵』					国立公文書館
264	歐陽脩	写真						アフロ
265	北宋の銅銭	写真						CPC
266	狸奴小影(李迪筆)	写真			李迪			CPC
266	『中国名文選』	写真	『中国名文選』	表紙	興膳 宏	岩波書店	2008年	自社で撮影
300	東三条殿復元模型	写真						国立歴史民俗博物館
300	(寢殿の内部)	写真						池浩三/西村孝一法律事務所
300	(牛車)	写真	『故実叢書 輿車図考附図』		今泉定介	吉川弘文館	1900年	弘前市立弘前図書館
301	中世初期公家調度(復元)	写真						
301	夏の暑い日、釣殿で涼む光源氏と公達	写真	『源氏物語六条院の生活』より釣殿での涼み(常夏)					風俗博物館
302	やまぶき	写真						PIXTA
302	やなぎ	写真						PIXTA
302	ふじ	写真						PIXTA
302	さくら(やまざくら)	写真						PIXTA
302	うめ	写真						PIXTA
302	つばくらめ(つばめ)	写真						PIXTA
302	うぐいす	写真						PIXTA
302	せり	写真						PIXTA
302	なずな	写真						PIXTA
302	ごぎょう	写真						PIXTA
302	はこべら(はこべ)	写真						PIXTA
302	ほとけのぎ(たびらこ)	写真						PIXTA
302	すずな(かぶ)	写真						PIXTA
302	すずしろ(だいこん)	写真						PIXTA
302	うのはな(うつき)	写真						PIXTA
302	すえつむはな(べにばな)	写真						PIXTA
302	あおい	写真						PIXTA
302	ほととぎす	写真						PIXTA
302	ほたる	写真						PIXTA
302	かきつばた	写真						PIXTA
302	しょうぶ(あやめ)	写真						PIXTA
302	はちす(はす)	写真						PIXTA
303	たちばな	写真						PIXTA
303	さざんか	写真						PIXTA
303	みやこどり(ゆりかもめ)	写真						PIXTA
303	ちどり	写真						PIXTA
303	おし(おしどり)	写真						PIXTA
303	まき	写真						PIXTA
303	かつら	写真						PIXTA
303	はぎ	写真						PIXTA
303	おぼな(すすき)	写真						PIXTA
303	くず	写真						PIXTA
303	なでしこ	写真						PIXTA
303	おみなえし	写真						PIXTA
303	ふじばかま	写真						PIXTA
303	あさがお(ききょう)	写真						PIXTA
303	かり・かりがね(がん)	写真						PIXTA
303	かり・かりがね(がん)	写真						PIXTA

申請図書		出典					備考		
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者		発行年次等	
303	しのぶ・しのぶぐさ(のきしのぶ)	写真						PIXTA	62231677
303	しおん	写真						PIXTA	50737039
303	さく	写真						PIXTA	60269619
303	きりぎりす(こおろぎ)	写真						PIXTA	39825264
303	まつむし(すずむし)	写真						PIXTA	12097225
303	ひぐらし	写真						PIXTA	23874784
303	あさじ(ち・ちがや)	写真						PIXTA	50687496
303	もみじ(かえで)	写真						PIXTA	5764219
306	歌合(『天徳四年内裏歌合復元図』)	写真	『天徳内裏歌合復元図』					京都文化博物館	
306	管弦の遊び(冷泉為恭筆「春秋行楽図」)	写真	『春秋行楽図』		冷泉為恭			MOA美術館	
306	双六盤(上)	写真						ColBase	
306	貝合(下)	写真						ColBase	
306	絵合(『源氏物語団扇画帖』)	写真	『源氏物語団扇画帖』					国文学研究資料館	
306	蹴鞠(『年中行事絵巻』住吉本(巻三))	写真						東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ	
307	葡萄色の小桂・紅梅襲の匂いの桂	写真						風俗博物館	
307	浅縹の小桂・紅の薄様襲の桂	写真						風俗博物館	
308	武官の束帯姿	写真	『有職故実』	第一巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
308	文官の束帯姿	写真	『有職故実』	第一巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
308	直衣	写真	『有職故実』	第一巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
308	狩衣	写真						風俗博物館	
309	(女房装束(前))	写真	『有職故実』	第二巻	鈴木敬三	全教図	1984年	全教図	
309	(女房装束(後ろ))	写真	『有職故実』	第二巻	鈴木敬三	全教図	1984年	全教図	
309	壺装束	写真						風俗博物館	
309	桂	写真	『有職故実』	第二巻	鈴木敬三	全教図	1984年	全教図	
310	(大鎧姿(前面))	写真	『有職故実』	第三巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
310	(大鎧姿(後面))	写真	『有職故実』	第三巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
310	兵庫鎖の太刀	写真	三鱗紋兵庫鎖太刀					ColBase	
310	(馬具をつけた馬)	写真	大和鞍					馬の博物館	
311	出産(『北野天神縁起絵巻』)	写真	『北野天神縁起絵巻』	巻八				北野天満宮	
311	五十日の祝い(『紫式部日記絵巻』)	写真	『紫式部日記絵巻』	第二段				五島美術館	
311	初冠(『聖徳太子絵伝』)	写真	『聖徳太子絵伝』	第一幅				ColBase	
311	露頭(『源氏物語絵巻』(宿木二))	写真	『源氏物語絵巻(宿木二)』					徳川美術館/DNPアートコミュニケーションズ	
311	五十の賀(『北野天神縁起絵巻』)	写真	『北野天神縁起絵巻』	巻二				北野天満宮	
311	野辺送り(『北野天神縁起絵巻』)	写真	『北野天神縁起絵巻』	巻八				北野天満宮	
314	矛	写真						CPC	JB-251b
314	戟	写真						CPC	JB-232
314	戦国時代の兵士	写真						CPC	JB-890
314	弩	写真						CPC	JB-237
314	盾	写真						CPC	JB-240
314	剣	写真						Colbase	
314	鼎	写真						Colbase	
315	皇帝の礼装(伝閻立本筆「隋の文帝」)	写真						ユニフォトプレス	9.AKG3808029
315	宮女の服装(伝周昉「簪花仕女図」)	写真						CPC	PT-13211
315	文官の服装(唐・章懐太子墓壁図「迎賓図」)	写真						時事通信社	47375090
315	鑿	写真						アフロ	236184882
315	環	写真						CPC	K1C000977N000000000PAC
315	珧	写真						ユニフォトプレス	3.5950982
315	琴	写真						サイネットフォト	ABM110486352
315	琵琶	写真						Colbase	
315	瑟	写真						アーデファクトリー	CPC KJ-46
315	筑	写真						CPC	JB-1045
見返⑤	易水	写真						アフロ	239033208
見返⑤	烏江	写真						CPC	YS-2804a
見返⑤	函谷関	写真						PIXTA	28852839
見返⑤	廬山(香炉峰)	写真						アフロ	142015711
見返⑤	三峽(西陵峽)	写真						CPC	YS-52106

- 4 (1) 写真等については、肖像権等の権利処理を必要に応じて行うこと。  
(2) 著作物の掲載に当たっては、著作権法第33条に基づき、掲載する旨を著作者に通知するとともに、補償金を著作権者に支払う必要があることに留意すること(別途契約を締結する場合を除く)。

備考4の内容について確認しました。☑

原典に加除訂正を加えた箇所と加除訂正の理由

単元名	ページ・行	本文	原典	訂正理由
古文編	p10・1	一〇〇	100	教科書採録の都合による。
	p10・4	九九番	99番	教科書採録の都合による。
	p11・2	一〇〇番目	100番目	教科書採録の都合による。
説話(一)	p18・5	参りにたりや	まいりにたるや	諸本により校訂。
	p21・上2	式部が娘、	同式部がむすめ、	一編の説話として完結性をもたせるため。
	p21・上2	わづらひけり。〈改行〉		わかりやすくするため。以下、改行した箇所については同様の理由による。
随筆(一)	p31・6	をかしかれ。〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
物語(一)	p41・1	おいつきて	をいつきて	注5に示した解釈をしたため。
	p47・2	皮衣を見ていはく、〈改行なし〉		採録スペースの関係による。以下、会話文の改行については同様の理由による。
	p47・5	わびさせ奉らせ給ひそ。	わびさせ給たてまつらせ給そ。	諸本により校訂。
	p47・6	嫗の心にも	女の心にも	諸本により校訂。
	p48・4	よみ給ひける歌の返し、	詠み給へる歌の返し、	諸本により校訂。
	p50・6	黄金給はりて、	黄金給(たまひ)て、	古本系の本文により校訂。
	p51・3	嫗抱きて	女いだきて	諸本により校訂。
	p51・11	嘆かせ奉らぬほどまで侍らむ。	嘆かせたてまつらぬほどまで侍らで、	諸本により校訂。
随筆(二)	p59・1	濃きも薄きも紅梅。〈改行なし〉		内容として続いているので、わかりやすくするため。以下、改行をはずした箇所については同様の理由による。
	p60・1	よにすさまじきものにして、	よにすさまじきものにて、	諸本により校訂。
	p62・2	乳児亡くなりたる産屋。〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p62・9	え問ひにだにも問はず。	え問ひだにも問はず、	諸本により校訂。
	p63・2	いとほしう、	いとおかしう	諸本により校訂。
	p63・2	すさまじげなり。	すさまじげなる。	諸本により校訂。
物語(二)	p68・小題ほか	忠度	忠教	一般的な表記に改めた。
和歌・俳諧	p83・1	妻に別れて	妻を別れて	諸本の校訂に従う。
物語(三)	p102・4	言ふやう、〈改行なし〉		採録スペースの関係による。以下、会話文の改行については同様の理由による。
	p103・3	大宅世継	大宅世次	一般的な表記に改めた。
	p103・9	繁樹	重木	一般的な表記に改めた。
	p103・10	いとあさまじうなりぬ。〈改行なし〉		教科書採録の都合による。
	p103・11	居寄りなどしけり。〈このあと原文削除〉		教科書採録の都合による。
日記	p116・1	九月ばかりになりて	さて、九月ばかりになりて	部分採録のため。
物語(四)	p129・10	男皇子	男御子	帝の「みこ」については「皇子」「皇女」の表記に統一した。
	p130・13	もの思ひをぞし給ふ。〈改行なし〉		教科書採録の都合による。
	p132・6	十ばかりにやあらむ	十ばかりやあらむ	原典の誤りと思われるため。
評論	p142・1	「すべて、あまりに	また、人、「すべて、あまりに	部分採録のため。
	p146・6	行く末うたてのみ侍るは。	行末うたてのみはべれば、	底本の黒川本の本文が「侍は」であることから、文意に合わせて「侍るは。」と読むように校訂。
	p149・1	申ししは、〈このあと小題削除〉		教科書採録の都合による。
	p149・6	なりぬる。」とぞ。〈このあと小題削除〉		教科書採録の都合による。

単元名	ページ・行	本文	原典	訂正理由	
漢文編	p151・10	情ならめや。〈このあと原文削除〉	現代詩を読むように、プーシキンやヴェルレーヌを読むように、漢詩を読むことができますでしょう。	採録スペースの関係による。	
	p156・8	収められています。〈このあと原文削除〉		煩雑さを避けるため。	
	p157・7	人はいません。〈このあと原文削除〉		教育的配慮による。	
	p157・9	持っています。〈このあと原文削除〉		教科書採録箇所以外の部分をさした表現であるため。	
	p158・2	現代詩を読むように、漢詩を読むことができますでしょう。		学習者に理解しやすくするため、日本の詩である現代詩と中国の詩である漢詩に限定した。	
故事・寓話	p162・1	人也〈このあと原文削除〉	島	わかりやすくするため。	
	p162・2	画之〈このあと原文削除〉		わかりやすくするため。	
漢詩の鑑賞	p163・1	賈島	島	わかりやすくするため。	
	p170・5	然	燃	通行本によって改めた。	
	p173・1	春社	村社	通行本によって改めた。	
諸家の思想	p177・9	何	可	通行本によって改めた。	
	p194・3	衣裘	衣輕裘	通行本によって改めた。	
	p195・6	潔	絜	通行本によって改めた。	
	p197・1	挺	挺	通行本によって改めた。	
	p198・6	折	共	通行本によって改めた。	
	p199・3	民	人	通行本によって改めた。p199・4、p199・5も同様。	
	p199・5	不害	不能害	通行本によって改めた。	
	p203・3	世知維之	維之	一本に従い補った。	
	逸話	p209・4	粗	犷	わかりやすくするため。p209・5も同様。
	三国志の世界	p220・4	諸葛亮	亮	抜粋であるので、学習者に理解しやすくするため。
p220・4		司馬懿	懿	抜粋であるので、学習者に理解しやすくするため。	
漢詩の鑑賞	p227・2	豉	菽	通行本によって改めた。	
	p228・5	比	此	通行本によって改めた。	
	p235・5	欄干	欄干	わかりやすくするため。	
項羽と劉邦	p238・7	枕言にせさせ給ふ。〈このあと原文削除〉	行略定秦地	採録スペースの関係による。	
	p240・13	楚軍行略定秦地		わかりやすくするため。	
	p245・4	眦		眦	通行本によって改めた。
	p246・4	毫毛		豪毛	一般的表記に改めた。
	p248・5	驪山		麗山	通行本によって改めた。
	p248・10	一双		一璧	通行本によって改めた。
	p254・8	項王		籍	わかりやすくするため。
名家の文章	p262・6	麤麤	麤	一本に従った。	

# ウェブサイトのアドレスの掲載箇所一覧表

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
1	3	二次元コード		自社ページURL	コンテンツリスト	別紙1添付
	3	URL		自社ページURL	コンテンツリスト	別紙1添付
	表4	二次元コード		自社ページURL	コンテンツリスト	別紙1添付
2	16	二次元コード		自社ページURL	『十訓抄』文字一つの返し 重要古語の確認	別紙2添付
3	18	二次元コード		自社ページURL	『古今著聞集』小式部内侍が大江山の歌の事 重要古語の確認	別紙3添付
4	19	二次元コード		自社ページURL	参考資料：和歌の修辞	別紙4添付
5	24	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』公世の二位のせうとに 重要古語の確認	別紙5添付
6	26	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』奥山に、猫またといふものありて 重要古語の確認	別紙6添付
7	28	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』相模守時頼の母は 重要古語の確認	別紙7添付
8	30	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』花は盛りに 重要古語の確認	別紙8添付
9	32	二次元コード		自社ページURL	『方丈記』ゆく川の流れ 重要古語の確認	別紙9添付
10	34	二次元コード		自社ページURL	『方丈記』安元の大火 重要古語の確認	別紙10添付
11	35	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『方丈記』「日の山の閑居」	別紙11添付
				自社ページURL	参考資料：『方丈記』「結び」	別紙12添付
				自社ページURL	参考資料：草庵図（推定）	別紙13添付
12	40	二次元コード		自社ページURL	『伊勢物語』初冠 重要古語の確認	別紙14添付
13	42	二次元コード		自社ページURL	『伊勢物語』通ひ路の関守 重要古語の確認	別紙15添付
14	44	二次元コード		自社ページURL	『伊勢物語』小野の雪 重要古語の確認	別紙16添付
15	46	二次元コード		自社ページURL	『竹取物語』火鼠の皮衣 重要古語の確認	別紙17添付
16	50	二次元コード		自社ページURL	『竹取物語』かぐや姫の昇天 重要古語の確認	別紙18添付
17	58	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』雪のいと高う降りたるを 重要古語の確認	別紙19添付
18	59	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』木の花は 重要古語の確認	別紙20添付
19	62	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』すさまじきもの 重要古語の確認	別紙21添付
20	64	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』大納言殿参り給ひて 重要古語の確認	別紙22添付
21	68	二次元コード		自社ページURL	『平家物語』忠度の都落ち 重要古語の確認	別紙23添付
22	72	二次元コード		自社ページURL	『平家物語』能登殿の最期 重要古語の確認	別紙24添付
23	77	二次元コード	国立国語研究所	<a href="https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/">https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/</a>	参考リンク：大英図書館蔵『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
24	81	二次元コード		自社ページURL	参考資料：近世俳風の比較	別紙25添付
				自社ページURL	参考資料：主要俳人活動時期一覧	別紙26添付
25	82	二次元コード		自社ページURL	『万葉集』 重要古語の確認	別紙27添付
26	85	二次元コード		自社ページURL	『古今和歌集』 重要古語の確認	別紙28添付
27	88	二次元コード		自社ページURL	『新古今和歌集』 重要古語の確認	別紙29添付
28	90	二次元コード		自社ページURL	春夏秋冬 重要古語の確認	別紙30添付
				自社ページURL	参考資料：近世俳風の比較	別紙25添付
				自社ページURL	参考資料：主要俳人活動時期一覧	別紙26添付
29	92	二次元コード		自社ページURL	参考資料：俳句の修辞	別紙31添付
30	94	二次元コード		自社ページURL	『沙石集』 児の知恵 重要古語の確認	別紙32添付
31	96	二次元コード		自社ページURL	『唐物語』 望夫石 重要古語の確認	別紙33添付
32	98	二次元コード		自社ページURL	『宇治拾遺物語』 亀を買ひて放つ事 重要古語の確認	別紙34添付
33	102	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』 雲林院の菩提講 重要古語の確認	別紙35添付
34	104	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』 弓争ひ 重要古語の確認	別紙36添付
35	106	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』 三舟の才 重要古語の確認	別紙37添付
36	108	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』 道長の豪胆 重要古語の確認	別紙38添付
37	114	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『大鏡』 「面をや踏まむ」	別紙39添付
				自社ページURL	参考資料：『大鏡』 「石山詣で」	別紙40添付
38	116	二次元コード		自社ページURL	『蜻蛉日記』 うつろひたる菊 重要古語の確認	別紙41添付
39	118	二次元コード		自社ページURL	『紫式部日記』 日本紀の御局 重要古語の確認	別紙42添付
40	120	二次元コード		自社ページURL	『更級日記』 門出 重要古語の確認	別紙43添付
41	122	二次元コード		自社ページURL	『更級日記』 源氏の五十余巻 重要古語の確認	別紙44添付
42	125	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『更級日記』の続き1「光源氏への憧れ」	別紙45添付
				自社ページURL	参考資料：『更級日記』の続き2「宮仕へ」	別紙46添付
				自社ページURL	参考資料：『更級日記』の続き3「結婚後の感慨」	別紙47添付
				自社ページURL	参考資料：『更級日記』の続き4「夫の死」	別紙48添付
43	128	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』 光る君誕生 重要古語の確認	別紙49添付
44	132	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』 若紫 重要古語の確認	別紙50添付
45	142	二次元コード		自社ページURL	『無名草子』 清少納言 重要古語の確認	別紙51添付

申請図書			学習上の参考に供する情報				備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要		
46	144	二次元コード		自社ページURL	『無名草子』紫式部 重要古語の確認	別紙52添付	
47	146	二次元コード		自社ページURL	読み比べる・紫式部日記 重要古語の確認	別紙53添付	
48	148	二次元コード		自社ページURL	『無名抄』深草の里 重要古語の確認	別紙54添付	
49	150	二次元コード		自社ページURL	『玉勝間』兼好法師が詞のあげつらひ 重要古語の確認	別紙55添付	
50	160	二次元コード		自社ページURL	「助長」 基本句形の確認	別紙56添付	
51	161	二次元コード		自社ページURL	「嬰逆鱗」 基本句形の確認	別紙57添付	
52	162	二次元コード		自社ページURL	「画竜点睛」 基本句形の確認	別紙58添付	
53	163	二次元コード		自社ページURL	「推敲」 基本句形の確認	別紙59添付	
				自社ページURL	参考資料：科挙	別紙60添付	
54	164	二次元コード		自社ページURL	「朝三暮四」 基本句形の確認	別紙61添付	
55	168	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『歴代名画記』巻八	別紙62添付	
				自社ページURL	参考資料：『聊斎志異』巻八「画馬」	別紙63添付	
				自社ページURL	参考資料：『杜陽雜編』巻中	別紙64添付	
56	170	二次元コード		自社ページURL	「鹿柴」 基本句形の確認	別紙65添付	
				自社ページURL	「絶句」 基本句形の確認	別紙66添付	
				自社ページURL	「除夜寄弟妹」 基本句形の確認	別紙67添付	
				自社ページURL	「遊山西村」 基本句形の確認	別紙68添付	
				自社ページURL	「鹿柴」 押韻確認問題	別紙69添付	
				自社ページURL	「絶句」 押韻確認問題	別紙70添付	
				自社ページURL	「峨眉山月歌」 押韻確認問題	別紙71添付	
				自社ページURL	「春夜」 押韻確認問題	別紙72添付	
				自社ページURL	「除夜寄弟妹」 押韻確認問題	別紙73添付	
				自社ページURL	「遊山西村」 押韻確認問題	別紙74添付	
				自社ページURL	参考資料：漢詩のきまり	別紙75添付	
57	174	二次元コード		自社ページURL	「不出門」 基本句形の確認	別紙76添付	
				自社ページURL	「送夏目漱石之伊予」 基本句形の確認	別紙77添付	
				自社ページURL	「不出門」 押韻確認問題	別紙78添付	
				自社ページURL	「冬夜読書」 押韻確認問題	別紙79添付	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
				自社ページURL	「送夏目漱石之伊予」 押韻確認問題	別紙80添付
			太宰府天満宮	<a href="https://www.dazaifutenmangu.or.jp/about/sugawaranomichizanekou">https://www.dazaifutenmangu.or.jp/about/sugawaranomichizanekou</a>	参考リンク：菅原道真と大宰府	
			古都大宰府保存協会	<a href="https://www.kotodazaifu.net/">https://www.kotodazaifu.net/</a>	参考リンク：古都大宰府	
			九州国立博物館	<a href="https://www.kyuhaku.jp/dazaifu/">https://www.kyuhaku.jp/dazaifu/</a>	参考リンク：西都太宰府	
			太宰府市日本遺産活性化協議会	<a href="https://www.dazaifu-japan-heritage.jp/intro/#step1">https://www.dazaifu-japan-heritage.jp/intro/#step1</a>	参考リンク：日本遺産太宰府	
			観世音寺	<a href="https://kanzeonji.net/">https://kanzeonji.net/</a>	参考リンク：観世音寺	
58	182	二次元コード		自社ページURL	「織女」 基本句形の確認	別紙81添付
59	184	二次元コード		自社ページURL	「売鬼」 基本句形の確認	別紙82添付
60	187	二次元コード		自社ページURL	「買粉児」 基本句形の確認	別紙83添付
61	192	二次元コード		自社ページURL	「論語」 基本句形の確認	別紙84添付
62	196	二次元コード		自社ページURL	「孟子」 基本句形の確認	別紙85添付
63	198	二次元コード		自社ページURL	「老子」 基本句形の確認	別紙86添付
64	200	二次元コード		自社ページURL	「荘子」 基本句形の確認	別紙87添付
65	202	二次元コード		自社ページURL	「韓非子」 基本句形の確認	別紙88添付
66	206	二次元コード		自社ページURL	「不顧後患」 基本句形の確認	別紙89添付
67	208	二次元コード		自社ページURL	「不若人有其宝」 基本句形の確認	別紙90添付
68	210	二次元コード		自社ページURL	「宋人有嫁子者」 基本句形の確認	別紙91添付
69	214	二次元コード		自社ページURL	「水魚之交」 基本句形の確認	別紙92添付
70	217	二次元コード		自社ページURL	「赤壁之戦」 基本句形の確認	別紙93添付
71	220	二次元コード		自社ページURL	「死諸葛走生仲達」 基本句形の確認	別紙94添付
72	226	二次元コード		自社ページURL	「子衿」 基本句形の確認	別紙95添付
				自社ページURL	「七歩詩」 基本句形の確認	別紙96添付
				自社ページURL	「雑詩」 基本句形の確認	別紙97添付
				自社ページURL	「遊子吟」 基本句形の確認	別紙98添付
				自社ページURL	「長恨歌」 基本句形の確認	別紙99添付
				自社ページURL	「子衿」 押韻確認問題	別紙100添付
				自社ページURL	「七歩詩」 押韻確認問題	別紙101添付
				自社ページURL	「雑詩」 押韻確認問題	別紙102添付

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
				自社ページURL	「遊子吟」 押韻確認問題	別紙103添付
				自社ページURL	「長恨歌」 押韻確認問題	別紙104添付
73	237	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『源氏物語』桐壺の巻	別紙105添付
74	240	二次元コード		自社ページURL	「項羽、大いに怒る」 基本句形の確認	別紙106添付
				自社ページURL	「剣の舞」 基本句形の確認	別紙107添付
				自社ページURL	「樊噲、頭髪 上指す」 基本句形の確認	別紙108添付
				自社ページURL	「沛公、虎口を脱す」 基本句形の確認	別紙109添付
75	250	二次元コード		自社ページURL	「時 利あらず」 基本句形の確認	別紙110添付
				自社ページURL	「項王の最期」 基本句形の確認	別紙111添付
76	258	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『史記』高祖本紀	別紙112添付
77	260	二次元コード		自社ページURL	「猫相乳」 基本句形の確認	別紙113添付
78	262	二次元コード		自社ページURL	「臨江之麋」 基本句形の確認	別紙114添付
79	264	二次元コード		自社ページURL	「売油翁」 基本句形の確認	別紙115添付
80	264	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『莊子』養生主編	別紙116添付
81	264	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『莊子』天道編	別紙117添付
82	302(3)	二次元コード	サントリーホールディングス	<a href="https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/">https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/</a>	参考リンク：日本の鳥百科	
83	302(3)	二次元コード		自社ページURL	参考動画：虫の鳴き声	別紙118添付
84	306(7)	二次元コード		自社ページURL	参考動画：雅楽で使用する楽器	別紙119添付
85	308(9)	二次元コード	風俗博物館	<a href="https://costume.iz2.or.jp/">https://costume.iz2.or.jp/</a>	参考リンク：日本服飾史	
86	318(19)	二次元コード	立命館大学アート・リサーチセンター／京都市平安京創生館	<a href="https://www.arc.ritsumeit.ac.jp/archive01/theater/html/heian/">https://www.arc.ritsumeit.ac.jp/archive01/theater/html/heian/</a>	参考リンク：平安京オーバーレイマップ	

古文編

漢文編

巻末図録・地図

107-222 (書名入る)

著作権について

第I部

第II部

1問 / 6問

次の古語の意味を答えよう。  
召し返す

解答を見る

1問 / 6問

次の古語の意味を答えよう。  
下る

解答を見る

和歌の修辞

修辞	枕詞	序詞	掛詞
<p>解説 ● 用例</p> <p>下の特定の語にかかる、習慣的、固定的な修飾の言葉。普通五音からなる。</p> <p>● <b>あかねさす</b> 紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る (六・二・二)</p> <p>● <b>鮎魚取り</b> 海辺をさして (六・三)</p>	<p>下にある語句を導き出すための前置きの語句。普通七音以上からなる。自由に創作され、具体的なイメージを与える。比喩によって導き出す</p> <p>● <b>むすぶ手のしづくに</b> ぐる山の井の鮎かでも人に別れぬるかな (六・13)</p> <p>● 同音反復によって導き出す</p> <p>● <b>ほととぎす 鳴くや五月のあやめくさ</b> あやめも知らぬ恋もするかな (六・2)</p>	<p>同音を利用し、一つの言葉で二つ以上の意味を言い表す技法。</p> <p>「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける</p> <p>● 下燃えに思ひ消えなん煙たに跡なき雲の果てぞ悲しき (六九・3)</p>	
<p>修辞</p> <p>解説 ● 用例</p> <p>一首のうちのある語と、意味上関係の深い語。掛詞とともに使われることが多い。</p> <p>● 玉の緒よ絶えなば絶えながらへば忍ぶることの弱りもぞする (六・8)</p> <p>「絶え」ながらへ「弱り」は、「緒」の縁語。「緒」はひも・糸の意。「玉の緒」は、「魂」をつなぎとめる緒で、命のこと。</p>	<p>縁語</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p>	<p>本歌取り</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p> <p>● 秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月 (六・4)</p>	<p>止言</p> <p>● 明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末の白雲 (六・6)</p> <p>● 明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末の白雲 (六・6)</p> <p>● 明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末の白雲 (六・6)</p>

別紙 5

1問 / 5問

次の古語の意味を答えよう。  
せうと

解答を見る

別紙 6

1問 / 6問

次の古語の意味を答えよう。  
ありく

解答を見る

別紙 7

1問 / 7問

次の古語の意味を答えよう。  
手づから

解答を見る

別紙 8

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。  
くまなし

解答を見る

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。  
うたかた

解答を見る

1問 / 10問

次の古語の意味を答えよう。  
春秋

解答を見る

## 方丈記

鴨長明

## 日野山の閑居

わが身、父方の祖母おほばの家を伝えて久しくかの所に住む。その後、縁欠けて身衰へ、憊しのぶ方々しげかりしかど、つひに跡とむることを得ず、三十余みそぢりにして、さらにわが心と一つの庵いほりを結ぶ。これをありし住まひに並ぶるに、十分が一なり。居屋みやばかりを構へて、ほかばかり屋を作るに及ばず。わづかに築地ついでぢを築けりといへども、門かどを建つるたづきなし。竹を柱として車を宿せり。雪降り、風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所、河原近ければ、水の難も深く、白波しらなみのおそれも騒がし。

すべて、あられぬ世を念じ過ぐしつつ、心を悩ませること三十余年なり。その間、折々の違ひめ、おのづから短かき運を悟りぬ。すなはち、五十いそぢの春を迎へて、家を出で世を背けり。もとより妻子なければ捨てがたきやすがもなし。身に官禄あらず、何につけてか執しよをとどめん。むなしく大原山の雲に臥ふして、また五返いつかへりの春秋をなん経にける。

ここに六十むそぢの露消えがたに及びて、さらに末葉すゑはの宿りを結べるこ  
とあり。いはば、旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕の繭を営むが  
ごとし。これを中なかごろの住みかに並ぶれば、また百分が一に及ば  
ず。とかくいふほどに、よはひは歳々としとしに高く、住みかは折々に狭せほ



し。その家のありさま世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるがゆるぎに地を占めて作らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継ぎ目ごとにかけてがねを掛けたり。もし心になはぬことあらば、やすくほかへ移さんがためなり。その改め作ること、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二両、車の力を報ふほかには、さらにほかの用途いらず。

今、日野山の奥に跡を隠してのち、東に三尺余の庇をさして、柴折りくぶるよすがとす。南、竹の簀子を敷き、その西に關伽棚を作り、北に寄せて障子を隔てて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢を描き、前に法花経を置けり。東のきはに蔽のほども敷きて、夜の床とす。西南に竹のつり棚を構へて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち、和歌・管弦・往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに琴・琵琶おのおの一張を立つ。いはゆる折琴・継琵琶これなり。仮の庵のありやう、かくのごとし。

その所のさまを言はば、南に懸け樋あり。岩を立てて、水をためたり。林の木近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。まさきのかづら、跡埋めり。谷しげけれど、西晴れたり。観念の頼り、なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲のごとくして西方にほふ。夏はほととぎすを聞く。語らふごとに死出の山路を契る。秋はひぐらしの声、耳に満てり。うつせみの世をかなしむほど聞こゆ。冬は雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

## 方丈記

鴨長明

## 結び

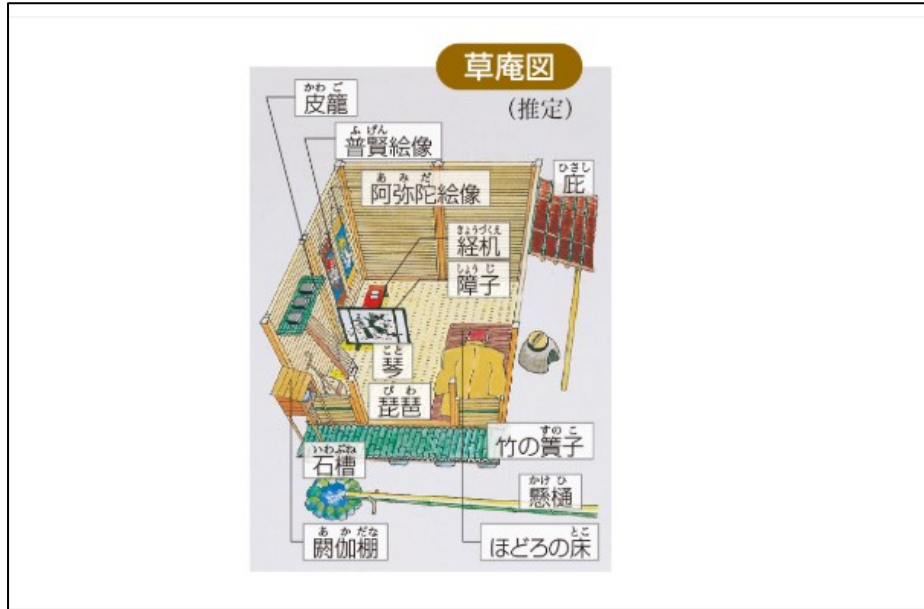
そもそも一期いちじの月影かたぶきて、余算、山の端はに近し。たちまちに三途さんづの闇に向かはんとす。何のわざをかかこたんとする。仏の教へ給ふおもむきは、ことに触れて執心なかれとなり。今、草庵を愛するもとがとす。閑寂かんせきに著しやくするもさはりなるべし。いかが要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさん。

静かなる暁、このことわりを思ひ続けて、みづから心に問ひていはく、世を逃れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はんとなり。しかるを、なんじ姿は聖人ひじりにて、心は濁りに染しめり。住みかはすなはち浄名居士じやうみやうこじの跡をけがせりといへども、保つところはわづかに周利槃特しゆりはんたくが行ひにだに及ばず。もしこれ貧賤せんの報ひのみづから悩ますか、はたまた妄心のいたりて狂きやうせるか。そのとき心さらに答ふることなし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請ふせうの阿弥陀仏あみだぶつ、両三遍申してやみぬ。

時に、建曆ふたじせの二年、弥生のつごもりごろ、桑門さうもんの蓮胤れんいん、外山とやまの庵いはりにして、これを記す。

## 方丈記





1問 / 13問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
領る

1問 / 8問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
又々

1問 / 9問

解答を見る

例の  
次の古語の意味を答えよう。

1問 / 11問

見ず 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 15問

清らなり 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 4問

物語 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 15問

つこもり 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 21

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
すさまじ

別紙 22

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
念ず

別紙 23

1問 / 12問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
あはれなり

別紙 24

1問 / 8問

解答を見る

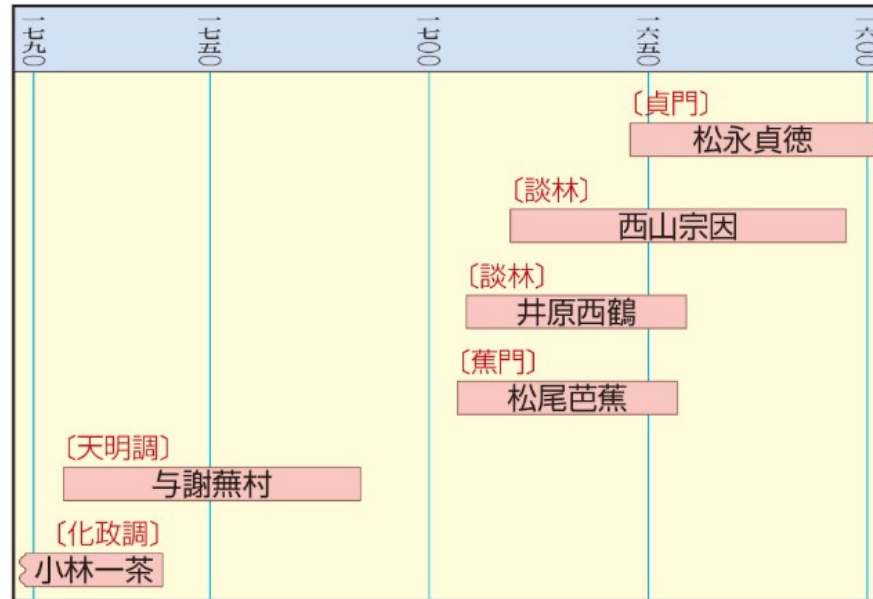
次の古語の意味を答えよう。  
な…そ

## 参考資料：近世俳風の比較

化政調〈小林一茶〉 かせいちよう こばやいつき	天明調〈与謝蕪村〉 てんめいらやう よきぶそん	蕉風〈松尾芭蕉〉 しやうふう まつお ばしやう	談林〈西山宗因〉 だんりん にしやまそういん	貞門〈松永貞徳〉 ていもん まつながていとく	呼称・代 表俳人
文化～文政(1804～1830)	天明(1781～1789)	元禄(1688～1704)	延宝～貞享(1673～1688)	寛永～寛文(1624～1673)	時期
月並調の俳諧が大勢を占める中、生活に根ざした、人間味あふれる句を作った。	蕉風復帰の運動。南宋の画論から離俗論を唱えた。	放埒になつた俳諧を革新し、風雅・閑寂な境地を開いた。俳諧を芸術に高めた。	貞門俳諧のマンネリ化に対し、方式を自由にして、俳諧を庶民に開放した。	山崎宗鑑や荒木田守武らによって流布した俳諧連歌を俳諧として独立させた。	活動
主観的・現実的。俗語や方言を使い生活感情を率直に詠む。 ●名月を取つてく れると泣く子かな	浪漫的・叙情的。古典などに材料を求め。絵画的で印象鮮明な作風。 ●牡丹散つてうち 重なりぬ二三片	わび・さび・しをり・ほそみ。平易な表現で人生の深遠を象徴的に詠む。 ●この道や行く人 なしに秋の暮れ	軽妙洒脱。斬新で奇抜な趣向を求め。破格表現が多い。 ●やがて見よ棒く らはせん蕎麦の花	言語遊戯的。縁語・掛詞などの技巧を用い、言葉の上での滑稽を求める。 ●ねぶらせて養ひ たてよ花のあめ	俳風

## ◆近世俳風の比較

參考資料：主要俳人活動時期一覽



1問 / 3問

解答を見る

次  
に  
は  
な  
し  
の  
古  
語  
の  
意  
味  
を  
答  
え  
よ  
う  
。

1問 / 4問

解答を見る

あ  
や  
な  
し  
の  
古  
語  
の  
意  
味  
を  
答  
え  
よ  
う  
。

1問 / 3問

解答を見る

見  
す  
の  
古  
語  
の  
意  
味  
を  
答  
え  
よ  
う  
。

1問 / 2問

解答を見る

見  
す  
の  
古  
語  
の  
意  
味  
を  
答  
え  
よ  
う  
。

俳句の修辞

修辞	季語	切れ字
<p>解説 ●用例</p> <p>句の中により込まれる季節を表す言葉。古来よまれてきたものもあれば、歴史の浅いものも存在する。季語は陰暦をもとにしており、現代とは季節感が異なるものもある。たとえば「七夕」は秋の季語である。</p> <p>●閑かさや岩にしみ入る 蟬の声 (夏) (奥の細道)</p> <p>●朝顔に釣瓶とられてもらひ水 (秋) (千代尼句集)</p> <p>季語がない無季の句も存在する。</p> <p>●歩行ならば杖つき坂を落馬かな (愛の小文)</p>	<p>句中や句末に用いて、意味を完結させたり、詠嘆や強調を表したりする言葉。連歌の発句では、十八の切れ字があるとされ、今日の品詞分類で分けると、「助詞」かな・もがな・ぞ・か・よ・や、(助動詞)けり・らむ・つ・ぬ・ず・じ、(動詞の活用)間尾)せ・れ・へ・け、(形容詞の活用)語尾)し、(副詞の一部)(いかに、となる。一方、芭蕉は句の内容を重視し、すべての字が切れ字になり得ると説いた。</p> <p>●仰のけに落ちて鳴きけり / 秋のせみみ (8)</p> <p>●海は少し遠きも花の木の間かな / (5・4)</p> <p>●草の戸も住み替はる代ぞ / 雛の家 (奥の細道)</p>	<p>切れ字</p>

◆主な季語一覧

季節	新年	春	夏	秋	冬
季語	1月～3月	4月～6月	7月～9月	10月～12月	
<p>小正月・元日・三ヶ日・初日・初酉・雑煮・年賀・お年玉・鏡餅・独楽・獅子舞・七草・門松・福笑い・啓初・寝正月・かまくら・伊勢海老・福寿草・仏の座・南無・薺・根白草・御形</p>	<p>寒・彼岸・花冷え・春分・八十八夜・臘月・東風・鶴・春一番・陽炎・短気楼・雪解・残雪・遠足・桜餅・花見・雑祭・風船・苗床・白魚・公魚・鶯・雲雀・燕・蛙・沈下花・桜・花・梅・柳・山吹・パレンタインデー・アネモネ・チューリップ</p>	<p>短夜・入梅・土川・夏至・熱帯夜・五月雨・夕立・雷・寝冷え・田・浴衣・海水浴・風鈴・鮎・鯉・鯉・金魚・鯉・蚊・海月・牡丹・萬籟・百日紅・梅・茄子・紫陽花・薔薇・向日葵・カーネーション・サイダー・ゼリー・アイスクリム</p>	<p>夜長・残暑・新涼・八朔・夜寒・天の川・十六夜・星月夜・鰯雲・名月・流星・野分・桐妻・七夕・送り盆・豊年・凶作・相撲・新米・釜山子・松虫・蟋蟀・渡り鳥・啄木鳥・鹿・秋刀魚・朝顔・南瓜・柿・栗・梨・芋・蕪子・紅葉・銀杏・コスモス</p>	<p>小春・霜夜・大晦日・行く年・大寒・節分・風・寒波・霜柱・時雨・雪・風邪・炬燵・手袋・七五三・生姜湯・雛鳥・鶯・鶯・鶯・鶯・節・河豚・牡蠣・山茶花・落ち葉・大根・枯草・早梅・オリオン・スキー・クリスマス・ストロブ・マスク</p>	

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。  
口ひら

解答を見る

1問 / 7問

次の古語の意味を答えよう。  
はかなくなる

解答を見る

1問 / 6問

次の古語の意味を答えよう。  
まじへ

解答を見る

1問 / 2問

次の古語の意味を答えよう。  
まか

解答を見る

1問 / 7問

次の古語の意味を答えよう。  
あそはす

解答を見る

1問 / 7問

次の古語の意味を答えよう。  
ひととせ

解答を見る

1問 / 13問

次の古語の意味を答えよう。  
こはし

解答を見る

## 大鏡

面<sup>つら</sup>をや踏まむ

1 四条の大納言のかく何事もすぐれ、めでたくおはしますを、<sup>2</sup>大入道殿、「いかでか、かからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ、くちをしけれ。」と申させ給ひければ、<sup>3</sup>中関白殿・<sup>4</sup>栗田<sup>あはた</sup>殿などは、げにさもとやおぼすらむと、はづかしげなる御けしきにて、ものものたまはぬに、<sup>5</sup>この入道殿は、いと若くおはします御身にて、「影をば踏まで、面をや踏まぬ。」とこそ仰せられけれ。

(太政大臣道長)

- 1 四条の大納言 藤原公任 (九六六―一〇四一)。
- 2 大入道殿 藤原兼家 (九二九―九九〇)。
- 3 中関白殿 藤原道隆 (九五三―九九五)。
- 4 栗田殿 藤原道兼 (九六一―九九五)。
- 5 この入道殿 藤原道長 (九六六―一〇二七)。



## 大鏡

石山詣で

1 故女院にようあんの御石山詣いしやままうでに、2 この殿は御馬にて、3 帥殿そうちどのは車にて参り給ふに、さはることありて粟田口あはたぐちより帰り給ふとて、4 院の御車のもとに参り給ひて案内申し給ふに、御車もとどめられたれば、轅ながえを押さへて立ち給へるに、5 入道殿は御馬をおし返して、帥殿の御うなじのもとにいと近ううち寄せさせ給ひて、「とくつかうまつれ。日の暮れぬるに。」と仰せられければ、あやしくおぼされて見返り給へれど、おどろきたる御けしきもなく、とみにも退のかせ給はで、「日暮れぬ。とくとく。」とそそのかせ給ふを、いみじうやすからずおぼせど、いかがはせさせ給はむ、やはら立ち退のかせ給ひにけり。6 父大臣おとどにも申し給ひければ、「大臣かろ軽むる人のよきやうなし。」とのたまはせける。

(太政大臣道長)

1 故女院 藤原詮子（九六二―一〇〇一）。

2 この殿 藤原道長（九六六―一〇二七）。

3 帥殿 藤原伊周（九七四―一〇一〇）。

4 院 藤原詮子。

5 入道殿 藤原道長。

6 父大臣 藤原道隆（九五三―九九五）。



1問 / 5問

あやし

次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 13問

あやし

次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 9問

あやし

次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 11問

あやし

次の古語の意味を答えよう。

心もとなし

解答を見る

## 更級日記

菅原孝標女

## 光源氏への憧れ

かやうにそこはかなきことを思ひ続くるを役やくにて、もの詣でをわづかにしても、はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられず。このごろの世の人は、十七、八よりこそ、経よみ、行ひもすれ、さること思ひかけられず。からうじて思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたち、ありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年としに一たびにても通はし奉りて、浮舟うきふねの女君のやうに、山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、ときどき待ち見などこそせめ。」とばかり思ひ続け、あらましごとにもおぼえけり。



## 更級日記

菅原孝標女

宮仕へ

聞こしめすゆかりある所に、「何となくつれづれに心細くてあらむよりは。」と召すを、古代の親は、みやづかへびと宮仕人はいと憂きことなりと思ひて過ぐさするを、「今の世の人は、さのみこそは出で立て。さてもおのづからよきためしもあり。さてもこころみよ。」といふ人々ありて、しぶしぶに出だしたてらる。

まづひとよ一夜参る。菊の濃く薄き八つばかりに、濃きかいねり搔練を上に着たり。さこそ物語にのみ心を入れて、それを見るよりほかに、行きかよふ類、しぞく親族などだにことになく、古代の親どものかげばかりにて、月をも花をも見るよりほかのことはなきならひに、立ち出づるほどの心地、あれかにもあらず、うつつともおぼえで、あかつき暁にはまかでぬ。

里びたる心地には、なかなか、定まりたらむ里住みよりは、をかしきことをも見聞きて、心も慰みやせむと思ふ折々ありしを、いとはしたなく悲しかるべきことにこそあべかめれと思へど、いかがせむ。



## 更級日記

菅原孝標女

## 結婚後の感慨

かう立ち出でぬとならば、さても宮仕への方かたにも立ち慣れ、世に紛れたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしてもてなさせ給ふやうもあらまし。親たちも、いと心得ず、ほどもなく籠め据ゑつ。さりとして、そのありさまの、たちまちにきららしき勢ひなどあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすずろ心にて、ことのほかにたがひぬるありさまなりかし。

幾いくちたび水の田た芹せりを摘とみしかは思おもひしことのつゆもかなはぬ

とばかりひとりごたれてやみぬ。

そののちは何となく紛らはしきに、物語のこともうち絶え忘れられて、ものまめやかなるさまに心もなり果ててぞ、などて、多くの年月をいたづらにて臥ふし起きしに、行ゆひをももの詣よでをもせざりけむ。このあらましごととでも、思おもひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薰かをる大将の宇治に隠し据ゑ給ふべきもなき世なり。あなものぐるほし。いかによしなかりける心なりと思おもひしみ果てて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもあり果てず。



## 更級日記

菅原孝標女

## 夫の死

九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見な  
いて、思ふ心地、世の中にまたたぐひあることとおぼえず。初  
瀬に鏡奉りしに、臥ふしまろび泣きたるかげの見えけむは、これに  
こそはありけれ。うれしげなりけむかげは、来きし方もなかりき。  
今ゆく末は、あべいやうもなし。二十三日、はかなく雲煙くもけぶりにな  
す夜、去年こぞの秋、いみじくしたてかしづかれて、1 うち添ひて下  
りしを見やりしを、いと黒きぬき衣の上に、ゆゆしげなる物を着て、  
車の供に、泣く泣く歩み出でてゆくを見出だして、思ひ出づる心  
地、すべてたとへむ方なきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふ  
に、その人や見にけむかし。



昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、行ひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび、「稲荷いなりより給ふしるしの杉よ。」とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神あまてるおほんかみを念じ奉れ。」と見ゆる夢は、人の御乳母めのとして、内裏うちわたりにあり、帝、後の御かげに隠るべきさまをのみ夢解きも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡のかげのみ違たがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心にものかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德も作らずなどしてただよふ。

1 うち添ひて下りし 作者の息子。

1問 / 17問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
やむことなし

1問 / 22問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
つれづれなり

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
ありがたし

1問 / 5問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。  
めでたし

1問 / 5問

次の古語の意味を答えよう。  
うたて

解答を見る

1問 / 6問

次の古語の意味を答えよう。  
夕暮る

解答を見る

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。  
くまなし

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不<sup>レ</sup>聞<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>長<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>振<sup>ル</sup>之<sup>者</sup>

（例文）  
宋<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>下<sup>ノ</sup>閔<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>長<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>振<sup>ル</sup>之<sup>者</sup>

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

若<sup>シ</sup> バ 則<sup>チ</sup>

〈例文〉  
 若<sup>シ</sup> 人<sup>ラ</sup> 有<sup>ラ</sup> 嬰<sup>ニ</sup> 之<sup>レ</sup> 者<sup>ニ</sup> 則<sup>チ</sup> 必<sup>ズ</sup> 殺<sup>ス</sup> 人<sup>ヲ</sup>

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

命<sup>シ</sup> A ニ B シ

〈例文〉  
 武<sup>シ</sup> 帝<sup>ニ</sup> 崇<sup>シ</sup> 飾<sup>ル</sup> 仏<sup>ヲ</sup> 寺<sup>ヲ</sup> 多<sup>ク</sup> 命<sup>ジ</sup> 僧<sup>ヲ</sup> 絲<sup>ニ</sup> 画<sup>ム</sup> 之<sup>ニ</sup>

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

未<sup>ダ</sup> シ

〈例文〉  
 欲<sup>シ</sup> 改<sup>ム</sup> 推<sup>シ</sup> 作<sup>ル</sup> 敵<sup>ヲ</sup> 引<sup>ク</sup> 手<sup>ヲ</sup> 作<sup>ル</sup> 推<sup>シ</sup> 敵<sup>ヲ</sup> 之<sup>ノ</sup> 勢<sup>ヲ</sup> 未<sup>ダ</sup> 決<sup>ム</sup>

解答を見る

**科挙**

科挙とは、隋ずいから清末しんに至るまで千三百年以上にわたって実施された、高級官僚の登用試験制度である。当初、進士しんし・明経めいけいなどの科目に分かれて選挙（人材任用）していたため「科挙」という。

儒家の理念においては、儒家思想を身につけた「君子」が民の上に立って政治を行うべきとされたため、それにふさわしい人材を選ぶ試験で、主に経学けい（儒教の経書の知識）・詩文（文学）・論策（政治論文）の三つの分野が出題された。

第一段階の試験である解試の合格率が1%を下回ることもある狭き門であったが、儒教社会においては、知識人である限り科挙を受験するのは当然とされ、ほぼ全員が科挙合格を目ざしたのである。

唐代の後半以降、僧侶などを除いたほぼすべての知識人にとって、科挙の合格は前半生の最大の目標であった。そのため科挙は、さまざまなジャンルの文章に影響を与えた。

**例** 王維わうい「九月九日憶山東兄弟」詩：科挙受験の準備のため、都長安ちゆうあんを一人で訪れた王維が、九月九日の重陽ちゆうようの節句の日に故郷の家族への思いをよんだ詩。

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。一

不  
レ  
レ  
セ

〈例文〉

恐  
ニ  
衆  
狙  
之  
不  
レ  
馴  
ニ  
於  
己  
也

解答を見る

## 名人の話

○楊子華ようしか

## 【書き下し文】

1 世祖せいその時 2 直閣將軍ちやくかく・3 員外散騎常侍ゐんぐわいさんきじやうじに任ぜらる。  
 嘗て馬を壁に画ゑがくに、夜ごとに蹄齧ていげつちやうめい長鳴するを聴き、水草を  
 索もとむるがごとし。

（『歴代名画記』れきだいめいがき 卷八）

## 【口語訳】

世祖の時、「楊子華は」直閣將軍・員外散騎常侍に任命された。壁に馬を描いたことがあったが、毎晩「馬が」足を踏みならしたり、歯がみをしたり、長く嘶いなないたりする声が出て、まるで水や草を欲しがっているようであった。

1 世祖 北齊の武成帝ぶせい高湛こうたん。五六一―五六五在位。

2 直閣將軍 將軍の称号の一つ。

3 員外散騎常侍 官名。皇帝の左右に侍して諫いさめる官。



## 名人の話

○趙孟頫

## 【書き下し文】

1 臨清の崔生、家は窶貧にして、困垣修せず。晨に起くる毎に、輒ち一馬の露草の間に臥するを見る。黒質にして白章あり。惟だ尾の毛のみ整はず、火の燎断する者に似たり。逐ひ去らしむるも、夜又復た来たり、自りする所を知らず。崔に好き友の、2 晋に官たる有り。往きて之に就かんと欲するも、健歩無きに苦しみ、遂に馬を捉へ勒を施して乗りて去らんとす。家人に囑属して曰はく、「倘し馬を尋ぬる者有らば、当に晋に如くをもつて以つて告ぐべし。」と。既に途に就けば、馬驚駛して、瞬息にして百里なり。夜甚だしくは芻豆を餓らはず、其の病めるを意ふ。次日 脚を緊しくして馳せしめざれば、馬は蹄嘶して沫を噴き、健怒すること昨のごとし。復た之を縦てば、午に已に晋に達す。時に騎りて市塵に入れば、観る者称歎せざる無し。晋王之を聞き、重直を以つて之を購はんとす。崔 失ふ者の尋ぬる所と為るを恐れ、敢へて售らず。居ること半年、耗無ければ、遂に八百金を以つて晋邸に貨り、乃ち自ら健騾を市ひて以つて帰る。後



王急務を以つて<sup>3</sup>校尉を遣はして騎りて臨清に赴かしむ。馬逸り、追ひて崔の東隣に至り、門に入りて見えず、諸を主人に索む。主は曾姓にして、実之を睹る莫し。室に入るに及び、壁間に<sup>4</sup>子昂の画馬一幀を掛け、内に一匹の毛色渾て似て、尾の処<sup>ところ</sup>香炷の焼く所と為るを見る。始めて馬の画妖なるを知るなり。

(『聊齋志異』卷八「画馬」)

【口語訳】

臨清の崔生は、家が貧しく、垣根も修理していなかった。

朝起きるたびに、一匹の馬が露の降りた草の間で寝ているのを見かけた。黒い地肌に白い模様があった。尻尾の毛だけがそろっておらず、火で焼き切ったようだった。追いはらっても、夜になるとまたやって来て、どこから来るのかわからなかった。崔には晋で仕官している親しい友人がいた。彼のもとに行こうと思っただが、よい乗り物がないことに困って、その馬を捕まえ轡を付けて、これに乗って出かけようとした。

家の者には、「もし馬を探しにきた人がいたら、晋に行くと告げるように。」と頼んでおいた。道に出てみると、馬は疾走して、あっという間に百里(約五八キロメートル)も進んだ。しかし夜になってもあまりまぐさや豆を食べないの  
で、馬が病気になるのかと思った。そこで翌日はしっかり





手綱たづなを引き絞しぼって走らせないようにすると、馬は足踏みして嘶いななき、泡を吹いて、前の日と同じようにいきり立っている。そこでまた馬を自由にさせると、昼にはもう晋に着いていた。時々この馬に乗って市場に出かけたが、見る者で称賛しない者はいなかった。晋王がそれを聞いて、高値で買おうとした。崔生は、馬をなくした者に尋ねて来られるのではないかと心配して、売ろうとしなかった。それから半年間晋にいたが、「臨清の自宅から、馬を探しにきた人がいたという」知らせはこなかったので、八百金の値で晋王の屋敷に売り、自分は元気なラバを買って帰ったのであった。のちに晋王は、急な用事のため、校尉を派遣してその馬に乗って臨清に行かせた。「臨清に着いたころ、」馬が逃げだし、崔ひがしの東隣どなりの家まで追いかけたが、門の中に入って見えなくなったので、その家の主人に馬を出すよう求めた。曾あるじという姓の主は、実際にはその馬を見たこともなかったが、部屋の中に入ってみると、壁に趙子昂の馬の絵が一幅いっぷく掛かっていて、見れば、その中の一匹が毛色がまるでそっくりで、尾のところ線香に焼かれていた。そこでようやく、その馬が絵の妖怪であることがわかったのであった。

## 1 臨清 今の山東省臨清市。

## 2 晋 今の山西省一帯。

3 校尉 官名。高級武官。

4 子昂 趙孟頫（一二五四―一三二三）あざなの字。なんそう南宋・げん元の著  
名な画家。――

## 名人の話

○韓志和

## 【書き下し文】

1 飛龍衛士韓志和は、本倭国の人なり。善く木を彫りて、鸞鶴鴉鵲の状を作し、飲啄動静、真と異なる無し。関板を以つて腹の内に置き、之を発すれば則ち雲を凌ぎて奮飛し、高さ三尺ばかり、一二百歩の外に至りて、方に始めて却下す。兼ねて木を刻みて猫兎を作り、以つて鼠雀を捕らへしむ。飛龍使其の機巧を異として、遂に事を以つて奏す。2 上睹て之を悦ぶ。志和 更に踏床の高さ数尺なるを彫る。其上 之を飾るに金銀綵繒を以つてし、之を見龍床と謂ふ。之を置けば則ち龍の形を見ず、之を踏めば則ち鱗鬣爪牙俱に出づ。始めて進むるに及び、上 足を以つて之を履めば、龍天矯として雲雨を得たるがごとし。上 怖畏し、遂に撤去せしむ。志和 上の前に伏して曰はく、「臣 愚昧にして、聖躬を驚忤せしむる有るを致す。臣 願はくは別に薄伎を進めて、稍至尊の耳目を娛しましめ、以つて死罪を贖はんことを。」と。上 笑ひて曰はく、「解くする所は何の伎ぞ。試みに我が為に之を作せ。」と。志和遂に懷中に於いて一桐木



の合子<sup>がふし</sup> 3方数寸なるを出だすに、中に物の蠅虎子<sup>ようこし</sup>と名づくる有り。数は啻<sup>た</sup>だに一二百なるのみならず。其の形は皆赤く、丹砂<sup>たんさ</sup>を以つて之に啖<sup>く</sup>らはすの故<sup>ゆゑ</sup>なりと云<sup>い</sup>ふ。乃ち分かちて五隊<sup>ごたい</sup>と為<sup>な</sup>し、涼州<sup>りやうしゅう</sup>を舞はしむ。上<sup>かみ</sup> 樂<sup>がく</sup>を召して、以つて其の曲を挙げしむるに、虎子盤<sup>こばん</sup>廻<sup>くわい</sup>宛<sup>ゑん</sup>転<sup>てん</sup>し、節<sup>ふし</sup>に中<sup>あ</sup>たらざる無し。詞を致す処<sup>あ</sup>に遇<sup>あ</sup>ふ毎<sup>ごと</sup>に、則<sup>すなは</sup>ち隱<sup>いん</sup>隱<sup>いん</sup>として蠅<sup>は</sup>声<sup>こゑ</sup>のごとし。曲の終はるに及び、累累<sup>るるい</sup>として退<sup>ひ</sup>き、尊卑<sup>そんひ</sup>の等級有るがごとし。志和 虎子を臂<sup>ひぢ</sup>にし、上の前に於いて蠅<sup>は</sup>を獵<sup>と</sup>らへしむるに、数百歩の内に於いて、鶴<sup>えう</sup>の雀<sup>すずめ</sup>を捕らふるがごとく、獲<sup>え</sup>ざる者有ること罕<sup>まれ</sup>なり。上 其の小にして観るべき有るを嘉<sup>よみ</sup>し、即<sup>すなは</sup>ち賜<sup>たま</sup>ふに雜<sup>ざ</sup>綵<sup>さい</sup>銀<sup>ぎん</sup>椀<sup>わん</sup>を以つてす。志和 宮門を出でて、悉<sup>しつじつ</sup>く転じて他人に施す。年を逾<sup>こ</sup>えずして、竟<sup>つひ</sup>に志和の在る所を知らず。

（『杜陽雜編』卷中）

### 【口語訳】

飛龍衛士の韓志和は、もともと日本の人である。巧みに木を彫刻して、鸞<sup>らん</sup>（鳳凰<sup>ほうおう</sup>の一種）やツルやカラスやカササギの形にすることができ、「それらの彫刻の」水を飲み餌<sup>えさ</sup>をついばむといった動きは、本物と少しも違っていなかった。からくり仕掛けをその腹の中に入れ、動かしてみると雲に届きそうな勢いで飛び上がり、その高さは三尺ほど（約九〇センチ



メートル)、一二百歩(一五〇から三〇〇メートル)以上の遠くまで至って、そこでやっと降りてきた。また、木彫りの猫を作り、ネズミやスズメを捕まえさせた。飛龍衛の上官が彼の巧みな技を貴重なものと思って、このことを上奏した。

天子はそれを見て喜んだ。志和は、さらに高さ数尺の踏み台を彫った。その上は金銀や綾絹あやぎぬで飾られており、「見龍床」と呼んだ。この台を置いただけでは龍の形は見えず、この台

に上がると龍の鱗うろこやひれや爪つめや牙きばがみな見えてくるのであった。最初にこの台を献上したところ、天子が足で上がると、

龍が雲や雨を得たように勢いよく曲がりくねっていた。天子は怖がって、そのまま片付けさせた。志和は天子の御前に平伏して言った、「わたくしめは愚かで、御身おんみを驚かせ申し上げてしまいました。伏して願いますに、別にちよつとした芸をご覧に入れ、少々陛下の耳目を楽しませ申し上げて、死に値する罪を償いたいと存じます。」天子は笑って、「そなたにできるのはどんな芸か。試しに朕ちんのために披露ひろうしてみせよ。」と言った。志和はそこで懐から桐きりで作った数寸四方の箱を一つ取り出したが、その中には蠅虎子はえとりぐもという名前のものが入っていた。その数は一二百どころではない多さで、その色はどれも赤く、丹砂を食べさせたためであるという。そこでそれを五つの隊に分け、涼州の曲を踊おどらせた。天子は音楽

隊を召し出して、その曲を演奏させたところ、蠅虎子はぐる

ぐると回転し、それがリズムにぴったりと合っていた。歌詞を出す箇所になるたびに、かすかにハエの羽音のようなものが聞こえた。そして曲が終わると、ぞろぞろと帰って行き、まるで身分の上下があるかのようなようであった。志和は蠅虎子を腕にのせ、天子の御前でハエを捕まえさせたが、数百歩歩くうちに、まるでハイタカがスズメを捕らえるように、仕留められないものはほとんどなかった。天子はその芸が細かくて見る価値があることを褒め、さまざまな綾絹や銀の腕を志和に与えた。志和は宮殿の門を出ると、それらをすっかり他人にめぐんでやった。一年もしないうちに、志和の行方はわからなくなってしまった。

1 飛龍衛士 近衛兵。このえ 飛龍衛は都の近衛軍の名。

2 上 天子。『杜陽雜編』の話の配列からすると、唐とうの穆宗ぼくそう（八二〇―八二四在位）をさすと思われる。

3 方数寸 当時の一寸は約三・一センチメートル。

別紙 65

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

但<sup>マ</sup> マ マ マ  
聞<sup>ク</sup> ク ク ク  
人 ニ ニ ニ ニ  
語<sup>ノ</sup> ノ ノ ノ  
響<sup>ク</sup> ク ク ク

〈例文〉

解答を見る

別紙 66

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何<sup>レ</sup> レ レ レ  
日<sup>カ</sup> カ カ カ  
是<sup>ニ</sup> ニ ニ ニ  
帰<sup>ル</sup> ル ル ル  
年<sup>ノ</sup> ノ ノ ノ

〈例文〉

解答を見る

別紙 67

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

非<sup>キ</sup> キ キ キ  
病 ニ ニ ニ ニ  
容 ニ ニ ニ ニ  
非<sup>キ</sup> キ キ キ  
旧 ニ ニ ニ ニ  
日<sup>ニ</sup> ニ ニ ニ

〈例文〉

解答を見る

別紙 68

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

莫<sup>カレ</sup> カレ カレ カレ  
笑<sup>フ</sup> フ フ フ  
農 ニ ニ ニ ニ  
家 ニ ニ ニ ニ  
臘 ニ ニ ニ ニ  
酒 ニ ニ ニ ニ  
渾<sup>ニ</sup> ニ ニ ニ

〈例文〉

解答を見る

1問 / 1問

押韻してゐる漢字をすべて選ぼう。

解答

返 空  
景 山  
入<sub>リ</sub> 不<sub>ズ</sub>  
深<sub>シ</sub> 見<sub>レ</sub> 人<sub>ヲ</sub>  
林<sub>ニ</sub>

リセット

復<sub>タ</sub> 但<sub>シ</sub>  
照<sub>ス</sub> 聞<sub>ク</sub>  
青<sub>キ</sub> 人<sub>ヲ</sub>  
苔<sub>ノ</sub> 語<sub>ル</sub>  
上<sub>ニ</sub> 響<sub>ク</sub>

1問 / 1問

押韻してゐる漢字をすべて選ぼう。

解答

今 江  
春 碧<sub>ニ</sub>  
看<sub>ム</sub> 鳥<sub>ヲ</sub>  
又<sub>タ</sub> 逾<sub>リ</sub>  
過<sub>リ</sub> 白

リセット

何<sub>レ</sub> 山  
日<sub>ノ</sub> 青<sub>キ</sub>  
是<sub>レ</sub> 花<sub>ヲ</sub>  
歸<sub>ル</sub> 欲<sub>ス</sub>  
年<sub>ヲ</sub> 然<sub>ル</sub>

1問 / 1問

押韻してゐる漢字をすべて選ぼう。

解答

思<sub>フ</sub> 夜 影<sub>ハ</sub> 峨<sub>ガ</sub>  
君<sub>ヲ</sub> 発<sub>シ</sub> 入<sub>リ</sub> 眉<sub>ビ</sub>  
不<sub>ズ</sub> 清<sub>キ</sub> 平<sub>ハ</sub> 山  
見<sub>ユ</sub> 溪<sub>ノ</sub> 光<sub>ヲ</sub> 月  
下<sub>ニ</sub> 向<sub>カフ</sub> 江<sub>ノ</sub> 半  
渝<sub>ノ</sub> 三<sub>ノ</sub> 水<sub>ニ</sub> 輪<sub>ノ</sub>  
州<sub>ニ</sub> 峡<sub>ノ</sub> 流<sub>ル</sub> 秋

リセット

1問 / 1問

押韻してゐる漢字をすべて選ぼう。

解答

歌 春  
管 宵  
樓 一  
台 刻  
声 值  
細 千  
細 金

リセット

靴<sub>ノ</sub> 花<sub>ニ</sub>  
鬪<sub>ム</sub> 有<sub>リ</sub>  
院 清  
落 香  
夜 月  
沈 有  
沈 陰

1問 / 1問

押韻して、いしる漢字をすべて選ぼう。

解答

早	病	万	感
晩	容	里	時
重	非	経	思
飲	旧	年	弟
会	日	別	妹

こせり

羈	帰	孤	不
離	思	灯	寐
各	逼	此	百
長	新	夜	憂
成	正	情	生

1問 / 1問

押韻して、いしる漢字をすべて選ぼう。

解答

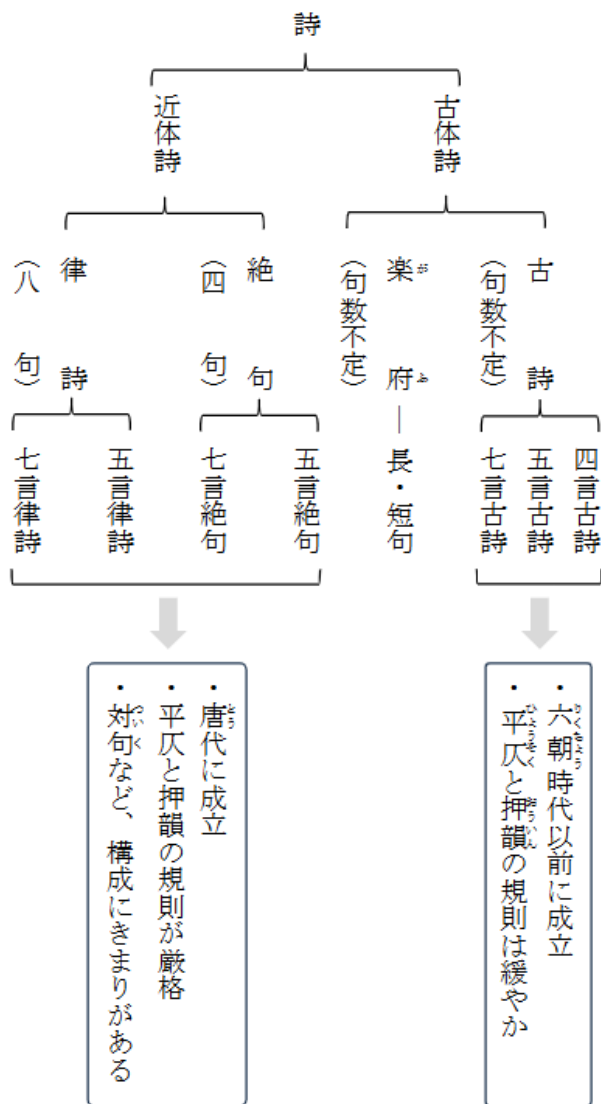
従	籥	山	莫
今	鼓	重	美
若	追	水	農
許	隨	復	家
閑	春	疑	職
乘	社	無	酒
月	近	路	渾

アムはこ

拄	衣	柳	豊
杖	冠	暗	年
無	簡	花	留
時	林	明	客
夜	古	又	足
叩	風	一	鵝
門	存	村	豚

# 漢詩のきまり

1 漢詩の形式  
漢詩にはさまざまな形式や規則、構成上のきまりがある。



▼絶句と律詩の形式  
◎は押韻する字。  
□ □ は対句。

<p><b>五言絶句</b> 5字×4句＝20字</p> <p>起句(第一句) ○○○○ 承句(第二句) ○○○○◎ 転句(第三句) ○○○○ 結句(第四句) ○○○○◎</p>	<p><b>七言絶句</b> 7字×4句＝28字</p> <p>起句(第一句) ○○○○○○ 承句(第二句) ○○○○○○◎ 転句(第三句) ○○○○○○ 結句(第四句) ○○○○○○◎</p>
---	---

<p><b>五言律詩</b> 5字×8句＝40字</p> <p>首聯(第一・二句) ○○○○◎ 領聯(第三・四句) ○○○○◎ 頸聯(第五・六句) ○○○○◎ 尾聯(第七・八句) ○○○○◎</p>	<p><b>七言律詩</b> 7字×8句＝56字</p> <p>首聯(第一・二句) ○○○○○○◎ 領聯(第三・四句) ○○○○○○◎ 頸聯(第五・六句) ○○○○○○◎ 尾聯(第七・八句) ○○○○○○◎</p>
---	---

## 2 漢詩の規則

### ▼押韻

押韻とは、句末の漢字音（当時の中国音）を合わせることで、詩を朗詠するときの響きを美しくする方法のことである。押韻された字を韻字と呼ぶ。どれが韻字であるかを確認する際は、現代日本語の音読みが目安となる。

古詩	律詩
偶数句末（一韻到底〓最後まで同一の韻／換韻〓途中で韻が変わる）	五言〓偶数句末 七言〓第一句末と偶数句末
・五言で第一句末も押韻する破格体もある ・換韻はしない	

### 例【規則どおりの場合】

王翰「涼州詞」

葡萄美酒夜光杯〓  
欲飲琵琶馬上催〓  
醉臥沙場君莫笑〓  
古來征戰幾人回〓

### 例【規則から外れた破格体の場合】

孟浩然「春曉」

春眠不覺曉〓  
處處聞啼鳥〓  
夜來風雨聲〓  
花落知多少〓

第一句末と偶数句末が押韻。

韻字は「杯」「催」「回」で  
同じ響き。

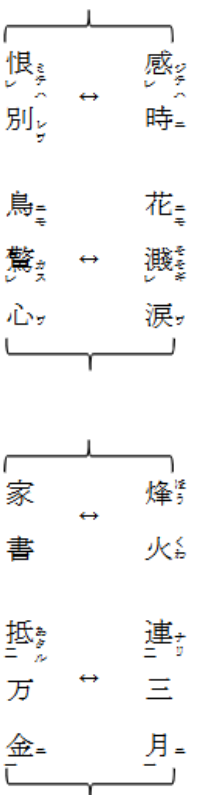
五言絶句だが第一句も押韻。

韻字は「曉」「鳥」「少」  
で同じ響き。

### ▼対句

対句とは、品詞・文構造・意味内容が何らかの対応関係を持っている二つの句のことである。原則として同じ返り点をつけることができ、対称性を利用した読解も可能である。

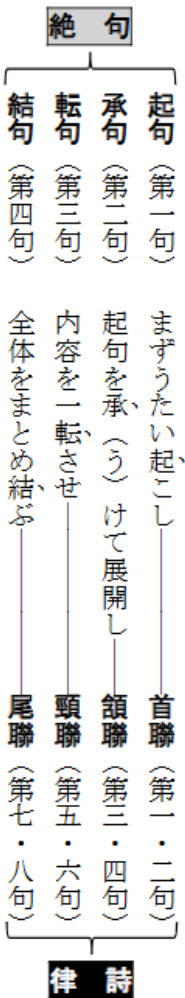
### 例 杜甫「春望」〔五言律詩の領聯と頸聯〕



◆とくに律詩（五言・七言）では、領聯と頸聯をそれぞれ対句にする原則がある。

▼起承転結

起承転結とは、絶句における構成の作法のことである。律詩においては、二句ごとのまとまりである首聯・頷聯・頸聯・尾聯が、これに相当する。



3 漢詩の構成と読解

▼一首の構成 (律詩・古詩)

律詩は二句ごと (二聯)、古詩は二句または四句ごとをひとまとまりにして解釈する。

例 李白「送友人」 (五言律詩)

青山横北郭，  
白水绕东城。

青い山なみが町の北に横たわり、白く光る水が町の東を回って流れる

此地一为别，  
孤蓬万里征。

この地でいったん別れを告げれば、孤独な蓬は万里の果てまで旅する

浮云游子意，  
落日故人情。

定めなく漂う雲は旅行く君の心、沈む夕日は見送る私の心

挥手自兹去，  
萧萧班马鸣。

手を振ってここから去れば、馬も寂しげに鳴くことだよ

▼一句の構成

原則、五言は「○○○○○」、七言は「○○○○○○」の区切りで解釈する。

例 柳宗元「江雪」 (五言絶句の起句)

千山鳥飛絕

多くの山から、鳥の飛び姿が消えて

例 杜牧「江南春」 (七言絶句の承句)

水村山郭酒旗風

水辺の村、山辺の集落、酒屋の旗が風に吹かれる

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

莫<sup>カレ</sup> 後<sup>ル</sup> 晩<sup>ル</sup> 花<sup>ニ</sup> 残<sup>シテ</sup>

〈例文〉

解答を見る

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

閑<sup>カ</sup> 取<sup>ク</sup> 乱<sup>ラン</sup> 軼<sup>ツ</sup> 思<sup>シ</sup> 疑<sup>ニ</sup> 義<sup>ギ</sup>

雪<sup>ユキ</sup> 撞<sup>ツク</sup> 山<sup>サン</sup> 堂<sup>ドウ</sup> 樹<sup>ジュ</sup> 影<sup>エイ</sup> 深<sup>シン</sup>

一<sup>イツ</sup> 櫓<sup>ロ</sup> 鈴<sup>リン</sup> 不<sup>フ</sup> 動<sup>ドウ</sup> 夜<sup>ヤ</sup> 沈<sup>シン</sup> 沈<sup>シン</sup>

一<sup>イツ</sup> 櫓<sup>ロ</sup> 鈴<sup>リン</sup> 不<sup>フ</sup> 動<sup>ドウ</sup> 夜<sup>ヤ</sup> 沈<sup>シン</sup> 沈<sup>シン</sup>

青<sup>セイ</sup> 灯<sup>トウ</sup> 万<sup>マン</sup> 古<sup>コ</sup> 心<sup>シン</sup>

青<sup>セイ</sup> 灯<sup>トウ</sup> 万<sup>マン</sup> 古<sup>コ</sup> 心<sup>シン</sup>

解答

アベロ

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何<sup>ナニ</sup> 為<sup>シ</sup> 寸<sup>セン</sup> 步<sup>ブ</sup> 出<sup>デ</sup> 門<sup>カド</sup> 行<sup>ク</sup>

〈例文〉

解答

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

閑<sup>カ</sup> 取<sup>ク</sup> 乱<sup>ラン</sup> 軼<sup>ツ</sup> 思<sup>シ</sup> 疑<sup>ニ</sup> 義<sup>ギ</sup>

雪<sup>ユキ</sup> 撞<sup>ツク</sup> 山<sup>サン</sup> 堂<sup>ドウ</sup> 樹<sup>ジュ</sup> 影<sup>エイ</sup> 深<sup>シン</sup>

一<sup>イツ</sup> 櫓<sup>ロ</sup> 鈴<sup>リン</sup> 不<sup>フ</sup> 動<sup>ドウ</sup> 夜<sup>ヤ</sup> 沈<sup>シン</sup> 沈<sup>シン</sup>

一<sup>イツ</sup> 櫓<sup>ロ</sup> 鈴<sup>リン</sup> 不<sup>フ</sup> 動<sup>ドウ</sup> 夜<sup>ヤ</sup> 沈<sup>シン</sup> 沈<sup>シン</sup>

青<sup>セイ</sup> 灯<sup>トウ</sup> 万<sup>マン</sup> 古<sup>コ</sup> 心<sup>シン</sup>

青<sup>セイ</sup> 灯<sup>トウ</sup> 万<sup>マン</sup> 古<sup>コ</sup> 心<sup>シン</sup>

解答

アベロ

別紙 80

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

解答

清明 僻地 空 去  
 二期 交 中 矣  
 再遊 懸 三 千里  
 会少 大 岳

アエボコ

莫後 狡見 海 未 送 君  
 晚教 起 生  
 花化 長 暮  
 残難 瀾 寒

別紙 81

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何  
 婦人  
 何能

〈例文〉

解答を見る

別紙 82

1問 / 7問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何所  
 欲至何所

〈例文〉

解答を見る

別紙 83

1問 / 7問

次の句形の読みと意味を答えよう。

止  
 止有  
 一男  
 寵態  
 過常

〈例文〉

解答を見る

別紙 84

1問 / 8問

次の句形の読みと意味を答えよう。

已<sup>レ</sup>矣<sup>ハ</sup>乎<sup>カ</sup>。

（例文）  
 已<sup>レ</sup>矣<sup>ハ</sup>乎<sup>カ</sup>、吾<sup>ガ</sup>未<sup>ダ</sup>見<sup>ズ</sup>能<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>過<sup>ト</sup>而<sup>シテ</sup>内<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>詠<sup>フ</sup>者<sup>ハ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

解答を見る

別紙 85

1問 / 5問

次の句形の読みと意味を答えよう。

弗<sup>レ</sup>由<sup>ル</sup>。

（例文）  
 舍<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>路<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>弗<sup>レ</sup>由<sup>ル</sup>。

解答を見る

別紙 86

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

莫<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>不<sup>コ</sup>争<sup>ハ</sup>故<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>莫<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>与<sup>フ</sup>之<sup>ノ</sup>争<sup>フ</sup>。

（例文）  
 莫<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>不<sup>コ</sup>争<sup>ハ</sup>故<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>莫<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>与<sup>フ</sup>之<sup>ノ</sup>争<sup>フ</sup>。

解答を見る

別紙 87

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

与<sup>フ</sup>。

（例文）  
 自<sup>ラ</sup>喻<sup>ル</sup>適<sup>ク</sup>志<sup>ニ</sup>与<sup>フ</sup>。

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

例文  
 伏 則 荒 荒 則 不 治 不 治 則 乱  
イ スレバ 則チ アサキ アサキ 則チ ナラズ ナラズ 則チ 乱ル

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

例文  
 何 苦 沾 衣 如 此  
ナニ シ 苦シム 沾ル 衣 ヲ 如ク

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

例文  
 若 与 我 者 皆 喪 宝 也  
シ 与ル 我ニ 者 皆 喪ル 宝ニ 也

解答を見る

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

例文  
 嫁 未 必 成 也  
嫁ニ 未ダ 必ズ 成ル 也

解答を見る

別紙 92

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよ。

孰不乎

〔例文〕  
孰不單食壺漿以迎將軍乎

解答を見る

別紙 93

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよ。

莫不

〔例文〕  
莫不失色

解答を見る

別紙 94

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよ。

其能久乎

〔例文〕  
其能久乎

解答を見る

別紙 95

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよ。

縦我往

〔例文〕  
縦我往

解答を見る

別紙 96

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何<sup>ナニ</sup>ソ

〈例文〉

相煎<sup>ニルコト</sup>何<sup>ナニ</sup>太<sup>はなはだ</sup>急<sup>ナル</sup>

解答を見る

別紙 97

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何<sup>ナニ</sup>必<sup>カナラシ</sup>骨<sup>ほね</sup>肉<sup>にく</sup>親<sup>おや</sup>

〈例文〉

何<sup>ナニ</sup>必<sup>カナラシ</sup>骨<sup>ほね</sup>肉<sup>にく</sup>親<sup>おや</sup>

解答を見る

別紙 98

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

誰<sup>タレ</sup>ソ

〈例文〉

誰<sup>タレ</sup>言<sup>い</sup>寸<sup>すん</sup>草<sup>くさ</sup>心<sup>こころ</sup> 報<sup>い</sup>得<sup>え</sup>三<sup>さん</sup>春<sup>しゅん</sup> 睡<sup>すい</sup>

解答を見る

別紙 99

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不<sup>い</sup>能<sup>ん</sup>ソ

〈例文〉

到<sup>いた</sup>此<sup>こゝ</sup> 踏<sup>ふ</sup>踏<sup>ふ</sup>不<sup>い</sup>能<sup>ん</sup>去<sup>く</sup>

解答を見る

1問 / 3問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

縦 青 我 不 往

青 青 子 矜

子 悠 寧 悠 不 嗣 音

悠 悠 我 心

解答

リセット

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

本 其 煮 自 在 豆 同 釜 持 根 下 作 生 然 羹

相 豆 澆 煎 在 鼓 何 釜 以 太 中 為 急 泣 汁

解答

リセット

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

及 盛 得 落 分 人 時 年 歡 地 散 生 当 不 当 為 逐 无 勉 重 作 兄 風 根 励 来 楽 弟 転 蒂

歳 一 斗 何 此 飄 月 日 酒 必 已 如 不 難 聚 骨 非 陌 待 再 比 肉 常 上 人 晨 隣 親 身 塵

解答

リセット

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

誰 臨 慈 言 行 母 寸 密 密 手 草 密 中 心 縫 線

報 意 遊 得 恐 子 三 遲 遲 春 遲 暉 歸 身 上 衣

解答

リセット



## 源氏物語

紫式部

## 桐壺卷・口語訳（抄）

どの（帝の）御代であったか、女御や更衣が大勢お仕えしていらっしやった中に、それほど高貴な身分ではない方で、きわだって帝のご寵愛を受けていらっしやる方がいた。（桐壺の更衣である。）

（宮仕えの）最初から自分こそは（帝の寵愛を得よう）と自負していらっしやった（女御の）方々は、（この方を）目に余るものと、蔑んだり、妬んだりなさる。（この方と）同じ身分、それより身分の低い更衣たちは、（女御の方々よりも）いっそう心穏やかでない。朝夕の宮仕えにつけても、ひどく他の女性たちの心を騒がせるばかりで、恨みを受けることが積もったのだろうか、ひどく病気がちになってゆき、何となく心細そうに実家に下がる人が多いのを、（帝は）いよいよたまらないほどいとしく不憫なものにお思いになって、人々の非難をもはばかりることがおできにならず、世の語りぐさにもなってしまうようなご待遇ぶりである。上達部や殿上人なども、困ったことだと目をそらしそらしして、まことに見てはいられないほどの更衣のご寵愛の受けようである。中国でも、このような原因によって、世の中も乱れ、悪いことになったものだと、だんだん世間一般でも、苦々しく、人々のもの悩みの種になって、楊



貴妃きひの先例までも引き合いに出してしまいそうになっていくので、



(更衣は) ともいたたまれないことが多いけれど、恐れ多い帝のご寵愛が比類ないのを頼りとして、宮仕えをしていらっしやる。

父の大納言は亡くなって、母である(大納言の)北の方が、古い家柄の出の人で、教養ある人であって、両親がうちそろい、現在世間の評判が華々しい御方々にもさほど劣らず、(宮中の)何事の儀式の折にもとりはからっていらっしやっただけでも、これといったしつかりした後見人がいないので、特別なことのあるときは、やはり頼るところもなく、心細い様子である。

前世においても、ご宿縁が深かったのだろうか、世にまたとなく清らかで美しい玉のような皇子みこ〔のちの光源氏〕までもお生まれになった。(帝は)早く(見たい)と待ち遠しくお思いになって、(その若君を)急ぎ参内させて御覧になると、めったにない幼子のお顔立ちである。第一皇子は、右大臣の(姫君である)女御の御腹(より生まれた皇子)であって、後見がしつかりし、疑いない皇太子(になられるお方)として、世間でも大切にお世話申し上げているが、この(第二皇子の)照り映えるお美しさにはお並びになりようもなかったので、(帝は第一皇子に対しては)並ひととおりの大切になさる御思いであって、この君を、かわいい秘蔵っ子とお思いになり大切にお世話なさることはこのうえない。



もともと（更衣は）並みの女官のような天皇のそば勤めをなさるはずの身分ではなかった。世間での評価もたいへん高く、身分の高い人らしく見えたが、（帝が）無理におそばにつき添わせなさるあまりに、しかるべき管弦のお遊びの折々や、どのような事でも由緒ある行事の折々には、まっ先に参上させなさる、またあるときにはお寝過ごしになって、そのまま（翌日も）おそばにお仕えさせなさるなど、無理やりにおそばから下がらせないよう待遇なさっていたうちに、自然と身分の軽い人にも見えたのだけれど、この皇子がお生まれになってからは、たいそう格別に待遇しようとお心づもりなさっていたので、東宮（皇太子）にも、悪くすると、この皇子がおつきになるはずのように見えると、一の皇子の（母である弘徽殿の）女御はお疑いになっていた。（この女御は）ほかの方より先に入内じゅだいなさって、（帝の）大切にお思いになるお気持ちは並々でなく、皇女たちなどもいらっしやるので、この御方のお諫めいさだけを、やはり気遣いなさり、気の毒なことともお思い申し上げていらっしやっ

た。

（更衣は帝の）恐れ多いご庇護ひごを頼り申し上げるのだけれど、

（一方では）蔑み、欠点をお探しになる人は多く、自分の身はか弱くはかない様子であって、かえって（ご寵愛がなかったらよかったのにと）思い悩みをなさる。（その更衣の）お部屋は桐壺である。

多くの女御・更衣の方々（の部屋の前）を素通りなさって、（桐壺の更衣の部屋への）ひっきりなしの帝のお通りによって、そうした方々が気が気でなくていらっしやるのも、いかにも当然のことと思われた。（更衣が帝のもとへ）参上なさる際も、あまりたび重なるときには、打橋や渡殿のあちらこちらの通り道に、けしからぬことをしては、（更衣の）お送りお迎えの女房たちの衣服の裾が（汚れて）、耐えられないほど不都合なこともある。またあるときには、どうしても通らなければならぬ馬道めどうの（両端の）戸を閉めて（更衣を）閉じこめ、（戸の）こちら側とあちら側で示し合わせ、進むも退くもできないようにして困らせなさるときも多いのである。何かにつけて、数えきれないほどつらいことばかりが増えるので、（更衣が）とてもひどく思いつめているのを、（帝は）いっそう不憫ふびんなものと御覧になって、後涼殿にもともとお仕えなさる更衣の部屋をほかにお移しになって、（その部屋を桐壺の更衣に）上局としてお与えになる。ほかに移された更衣の恨みは、まして晴らしようがない。

その年の夏、御息所〔桐壺の更衣〕は、ふとした病気にかかって、（養生のために）実家にご退出なさろうとするが、（帝は）お暇を全くお許しにならない。ここ数年来、病気がちがいつものこととなっていっしょだったので、（帝はそうした更衣の様子を）見慣

れなさっていて、「このままもうしばらく様子を見よ。」とばかり



仰せになるうちに、日に日に病状が重くおなりになって、ほんの五、六日の間に、ひどく衰弱するので、(更衣の)母君が涙ながらに帝にお願い申し上げて、実家に下がらせ申し上げなさる。このようなときにも、(宮中を死で穢す<sup>けが</sup>ような、)あってはならない不面目な事態となつてはたいへんだと、気配りをして、若君は(宮中にお残し申し上げて、人目につかないように退出なさる。

(宮中では死の穢れを忌む)きまりがあることなので、(帝は)そうむやみにお引き留めになることもできず、(帝というご身分柄、)お見送りすることさえもままならない心もとなさを、言いようもなく(悲しく)思われなさる。実につやつやとして美しく、いかにもかわいらしい人が、(今は)すっかり面やつれして、まことにしみじみと悲しみにうち沈みながら、(それを)言葉に出して申し上げることもできず、生きているのかいないのかわからないほどで絶え入りそうになっていらっしやるのを御覧になると、(帝は)後先のご分別もおなくしになり、あらん限りのことを、涙ながらにお約束あそばすのだが、(更衣は)お返事を申し上げることもおできにならず、まなざしなどもひどくだるそうな様子で、(ふだんよりも)いっそうなよなよとして、自他の区別もつかないほど正気を失ったありさまで横になっているので、(帝は)どうしたらよいかと途方にくれなさる。(更衣の退出にあたって、特別に)輦車<sup>てぐるま</sup>をお許しになる宣旨などを仰せになってからも、また(更衣の部屋に)

お入りになって、どうしても手放すことがおできにならない。「(人それぞれ決められている)死出の道にも、死に遅れたり先立ったりはするまいとお約束なされたのに。いくらなんでも(私を)置いては行けませんまい。」と仰せになるのを、更衣も(帝のお気持ち)を本当においたわしいことと拝見して、

(帝は)お胸がいっぱいにふさがるばかりで、全くうとうとすることもできず、夜を明かしかねておいでになる。(お見舞いの)お使者が行き来する時間もたたないのに、それでも気がかりなお気持ちをしきりにお漏らしになっておられたが、「夜中を過ぎるころに、息をお引き取りになった。」と言って(更衣の家の者たちが)泣き騒ぐので、お使いの者も、すっかり気落ちして宮中に帰参した。(この知らせを)お聞きあそばす(帝の)動転するお気持ち、何のご分別もつかないご様子で、部屋に閉じこもっておいでのになる。

(帝は、)若君を、このような状況でも(おそばに置いて)御覧になっていたいとお思いあそばすけれども、こうした母君の喪中に宮中に伺候なさるといのは、前例のないことなので、ご退出ということになる。(若君は、)何事が起きたのだらうかともお思いになっておらず、おそばの人々を取り乱して泣き、帝もお涙をとめどなく流していらっしやるのを、不思議そうにながめていらっしやるばかり。普通の場合でさえ、このような(母との)死別が悲しくな



いということはないのに、なおさら身にしみて哀れで何とも言いようがない。

あっけなく日数が過ぎて、（更衣の）七日七日の法事などにも、

（帝は）懇ろにご弔問あそばされる。時がたつにつれて、どうしようもなく悲しくお感じになられるので、女御、更衣たちの夜のご伺候なども全くなさろうともせず、ただ涙にひたって夜を明かし日を暮らしていらっしゃるから、（そのご悲嘆ぶりを）拝見する人までもが、涙の露にしめる秋である。「亡くなった後まで、胸の晴れそうもないご寵愛だこと。」と、弘徽殿の女御などは、相変らず容赦なしにおっしゃるのであった。（帝は、）一の皇子を御覧になるにつけても、（今は更衣の実家に住んでいる）若君への恋しさばかりが思い起こされては、気心の知れた女房や御乳母などを、たびたび（更衣の実家に）お遣わしになり、若君の様子をお尋ねになる。

野分めいた風が吹いて、急に肌寒さを感じさせる夕暮れのころ、

（帝は）常にもまして思い出しあそばすことが多くて、ゆげい みょう 輓負の命婦ぶという女房を（更衣の実家に）お遣わしになる。

夕方の月が美しい時刻に（命婦を）お送り出しなさって、（ご自身は）そのままぼんやりともの思いにふけておいでになる。このような夕べには、（更衣の生前は、よく）管弦の遊びなどをお催し



になったものだが、格別上手に琴の音をかき鳴らし、ふと帝のお耳に入れる言葉も、ほかの人とは違っていた（今は亡き更衣の）様子や顔つきが、幻となってひたと身に寄り添っているかのようにお感じになるにつけても、（はっきりした夢の中で会うのと、それほど変わらないものだ）と歌にある）「闇の現（うつつ）（暗闇の中で現実に会うこと）」にもやはり及ばないのだった。（それほど、はかないものであったよ。）

命婦が、更衣の邸やしきに到着し、（車を）門内に引き入れるなり、（邸内の）様子に哀趣を感じる。（更衣の母君は、夫に先立たれて）独り住まいであるけれども、娘の更衣一人を大事に育て上げなされるために、あれこれと手入れして見苦しくないように過ごしておられた、それが、亡き娘を思う悲しみにかきくれて泣きふ臥ふしていらつしやるうちに、草も高く生い茂り、野分にいつそう荒れた感じになって、月の光だけが、生い茂る雑草にもさえぎられずさしこんでいる。

（命婦を）南に面した部屋に招じ入れて、母君もすぐには何もおっしゃられない。「今まで生き長らえておりますのがまことにつらくございますのに、このような（帝からの恐れ多い）お使者が草深い家の草の露を分けてお訪ねくださるにつけても、まことにお恥ずかしいことで」と言って、いかにもこらえきれぬかのようにお泣きになる。（命婦は）「『お訪ねしてみますと、いつそうおいたわしく



て、魂も消え失せるようで。』と典侍が帝に申し上げておられましたが、（この私ごとき）もののわきまえのごさいませぬ者の心持ちにも、（典侍から）聞いていた通りたえがたくございます。」と言つて、少し気持ちを落ち着けてから、帝のお言葉をお伝え申しあげる。

「『（更衣が亡くなって）しばらくはこれは夢ではないのかとばかり途方にくれるほかなかったが、だんだんと気持ちが静まってくるにつけて、（かえって、夢ではないのだから）覚めようはずもなくこらえきれないこの悲しさは、どうしたらよいものかと相談できる人さえ（宮中には）いないのだから、（あなたが）内々で宮中に参つてくれないものか。若君が、ひどく気がかりなありさまで、涙がちの更衣の邸で暮らしておいでのなるのもいたわしく思われるから、早く参内なされよ。』などと、（帝は）はつきりと最後まで仰せにもなれず、何度も涙におむせかえりになっては、それでも一方では、みなも私を拝してお気弱なことだと思ふだろうかと、気がねなさらなくてもないご様子がおいたわしくて、（お言葉を）終わりまで承りきらないようなありさまで退出して参りました。」と言つて、（帝の）お手紙を差し上げる。

「（悲しみゆえに）目も見えませんが、このように恐れ多いお言葉を光といたしまして。」と言つて、（母君は）御覧になる。（帝からのお手紙には、）



時が経てば、少しは気の紛れることもあろうかと、（そのことを）心待ちに過ごしている月日（が流れる）につれて、まことに悲しみにたえがたいのは（私にはもう）どうしようもないことです。幼い若君をどうしているかといつも案じながら、あなたと一緒に養育できないのが気がかりなのです。今は、やはり（この私を）、亡き人の形見と思って宮中に参られよ。

若君はお休みになってしまわれていた。「（若君に）お目見え申し上げて、詳しく（その）ご様子を奏上いたしたくございますが、

（帝も）お待ちになっていらっしやることでしょうかし、（お目見えしていると）きっと夜も更けてしまうことでしょうか。」と言って

（命婦は宮中への帰りを）急ぐ。

「（子を思うゆえの）悲しみに迷う親心の闇もこらえられそうになく、その一端だけでも、晴らすことができますくらいにお話し申し上げたいことがございますので、（公のお使者としてでなく）私的にもごゆるりとおいでなさってください。この数年来、（更衣の叙位のような）うれしく晴れがましい機会にお立ち寄りいただきましたのに、こうした（悲しい）お言づてのお使者としてお目にかからせていただきますとは、本当に無情な巡り合わせでございます。」

（亡き娘は、）生まれたときから（私どもが）望みを託していた子でして、（父親の）故大納言が臨終の際まで、ただ、『この子の宮



仕えの宿願を、必ず成就させてさしあげよ。私が亡くなったからといって、不本意に志を捨ててはならない。』と、何度も言い含められておりましたので、しっかりとした後見をする人もない宮仕えは、かえってしない方がよいことと存じてはおりますものの、ただあの（亡くなった夫の）遺言に背くまいというだけのことです。宮仕えに出させていましたが、身に余るまでの（帝の）ご寵愛が、何かにつけてもつたいなくございましたので、（娘は）人並みにも扱われない恥を隠しながら、お付き合いをしなさっていたようですが、人の妬みが深く積もって、気の休まらないことがますます多くなってきましたところ、（天寿を全うしたのではない）自然ではないありさまで、とうとうこのようになってしまったのですから、かえって恨めしいことだと、恐れ多い（帝の）ご寵愛をつい（そのように）存じ上げてしまうのでございます。これもまた、（子を思う故に目が曇ってしまっている）どうしようもない親心の闇でございます。』と言いもおおせず、涙にむせかえっておいでになるうちに夜も更けた。

「帝も（それは）同じことです。『わが心ながら、世間の人が見て驚くほどに一途に（更衣のことが）いとしく思われていたのも、（思えば、私と更衣の仲が）長くは続くはずがなかったからなのだ』なあと、今となってはつらく思われる因縁だった。（自分としては）ほんのわずかでも他人の気を損ねるようなことは決してしていない

と思っているが、ただこの人〔更衣〕のために、受けなくてもよい人の恨みをたくさん受けたあげくに、このように後に残されて、心を静めるような方法がないのだから、ますますみっともない愚か者となってしまうたのにつけても、（私と更衣との）前世の因縁が（どのようなものであったのか）知りたいものだ。』と繰り返し仰せられては、涙にくれてばかりいらっしやいます。」と（命婦は）語って言葉も尽きない。涙ながらに、「夜もすっかり更けてしまいましたので、今夜のうちに（帝に）ご返事を奏上いたしましょう」と急いで帰参する。

（桐壺）

別紙 106

1問 / 5問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不得（しんじやく）

〈例文〉  
有リ兵 守リ関 不レ得レ入ル

解答を見る

別紙 107

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何以（なんぢ）

〈例文〉  
不レ然ル 籍 何 以 至 此

解答を見る

別紙 108

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何 為ル

〈例文〉  
客 何 為 者

解答を見る

別紙 109

1問 / 6問

次の句形の読みと意味を答えよう。

奈 何（なんぢ）

〈例文〉  
為 之 奈 何

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何<sub>レ</sub>  
<sub>レ</sub>也

〈例文〉  
是<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>楚<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>多<sub>キ</sub>也

解答を見る

1問 / 6問

次の句形の読みと意味を答えよう。

独<sub>リ</sub>  
<sub>レ</sub>

〈例文〉  
今<sub>レ</sub>独<sub>リ</sub>臣<sub>ノ</sub>有<sub>リ</sub>船

解答を見る

## 劉邦の人物像

## ① 劉邦の人柄

## 【書き下し文】

高祖 人と為り隆準にして竜顔、須髯美しく、左股に七十二の黒子有り。仁にして人を愛し、施しを喜び、意豁如たり。常に大度有り。

## 【口語訳】

高祖の人となりは、鼻が高くて竜のような顔つき（眉の骨が高く盛り上がった顔）で、ひげが美しく、左のももに七十二のほくろがあった。思いやりが深くて人をいつくしみ、施しを好み、心が広く細かいことにこだわらなかつた。常に度量が大きかつた。

## ② 儒者に面会したときの態度

## 【書き下し文】

西のかた<sup>1</sup>高陽を過ぐ。<sup>2</sup>酈食其監門に謂ひて曰はく、「諸將の此を過ぐる者多し。吾沛公を視るに、大人長者なり。」と。乃ち見



えて沛公に説かんことを求む。沛公方に牀まどに踞しやうし、両女子をして足を洗はしむ。酈生 拝せず、長揖ちやういふして曰はく、「足下必ず無道の秦しんを誅ちゆうせんと欲せば、宜よろしく踞して長者を見るべからず。」と。是こゝに於おいて沛公起たち、衣を擗とりて之これに謝し、上坐じやうざに延ひく。

### 【口語訳】

〔沛公は〕西方の高陽を通過した。酈食其が町の門番に言った、「ここを通過する將軍は数多いが、わしが見たところ、沛公は立派な人物だね。」そして沛公に自分の考えを説くために面会を申し入れた。沛公はちょうど、椅子いすに腰かけ、足を投げだして、二人の女に足を洗わせているところであった。酈生（酈食其）はひざまずく拝礼をせず、ただ両手を前で組む敬礼をして言った、「あなたがどうしても無道の秦を討とうとなさるなら、椅子にかけたままで徳ある人物に会うという無礼はしないほうがよろしい。」そこで沛公は立ちあがり、衣服の乱れを直して謝り、「〔酈食其を〕上座へと案内した。

1 高陽 今の河南省杞県の南西。

2 酈食其 ？―前二〇三。秦末漢初かんの儒者で遊説家。のちに劉邦に仕える。



③ 咸陽占拠時の振る舞い

【書き下し文】

漢の元年十月、沛公の兵遂に諸侯に先んじて<sup>1</sup>覇上に至る。<sup>2</sup> 秦王子嬰、素車白馬にて、頸に係くるに組を以つてし、皇帝の璽符節を封じ、<sup>3</sup> 軹道の旁らに降る。諸将或いは秦王を誅せよと言ふも、沛公曰はく、「始め<sup>4</sup> 懷王の我を遣はすは、固より能く寛容なるを以つてなり。且つ人已に服降するに、又之を殺すは不祥なり。」と。乃ち秦王を以つて吏に属し、遂に西のかた咸陽に入る。宮に止まりて休舎せんと欲するも、<sup>5</sup> 樊噲・<sup>6</sup> 張良諫む。乃ち秦の重宝財物の府庫を封じ、還りて覇上に軍す。

諸県の父老豪桀を召して曰はく、「父老 秦の苛法に苦しむこと久し。誹謗する者は族せられ、偶語する者は棄市せらる。吾 諸侯と約す、『先に関に入る者、之に王とせん。』と。吾当に関中に王たるべし。父老と約す。法は三章のみ。『人を殺す者は死し、人を傷つくるもの及び盗むものは罪に抵つ。』余は悉く秦の法を除去せん。諸の吏人 皆案堵すること故のごとくせよ。凡そ吾の来たる所以は、父老の為に害を除かんとすればなり。侵暴する所有るに非ず。恐るる無かれ。且つ吾の還りて覇上に軍する所以は、諸侯の至るを待ちて、約束を定めんとするのみ。」と。乃ち人をして秦の吏と県の郷邑を行りて之を告諭せしむ。秦人大いに喜び、争ひて牛羊酒食を持ちて、軍士に献饗す。沛公又譲りて受けずして曰はく、



「倉粟くらぐ多く、乏とほしきに非ず。人に費つぎやさしむるを欲せず。」と。人またますます又益喜び、唯ただ沛公の秦王と為らざらんことを恐る。

### 【口語訳】

漢の元年（前二〇六年）十月、沛公の軍隊は、ついに諸侯に先んじて覇上に到達した。秦王の子嬰は、白馬の引く飾りのない白木の車に乗り、首に「自殺の意思を示す」組みひもをかけ、皇帝の玉璽と割り符（命令や賞罰のしるしとするもの）を封印して、軹道のそばで降伏した。諸将のある者は秦王を誅殺せよと言ったが、沛公が言うには、「前に懷王がわたしを派遣されたのは、必ずわたしが寛容に振る舞うことができると考えられたからだ。そのうえ人がすでに降伏しているのに、なおこれを殺すのは不吉のもとだ。」と。そこで秦王を役人に委ね、そのまま西の咸陽へ入った。秦の宮殿にとどまって休息しようとしたが、樊噲と張良が諫めたので、沛公は秦の宝物・財物の入った倉庫を封印して、引き返して覇上に陣を構えた。

「沛公は、秦の」諸県の長老や有力者たちを呼びよせて言った、「あなた方は、秦の苛酷な法に長い間苦しんでこられた。『政治を』誹謗する者は親族皆殺しにされ、向かい合って「『詩経』や『書経』のような先王の法を」語る者は死体をさらしものにされた。わたしは諸侯と、『先に関中に入った者を、その王にしよう。』と約束した。わたしは当然、関中の王となるはずだ。あなた方と約束



しよう。法はただ三条だけだ。『人を殺した者は死刑に処す。人を傷つけた者と盗みをした者は、それ相当の罪に処す。』そのほかはすべて、秦の法を取り除こう。役人や人民たちは、安心して元の通りに生活せよ。そもそもわたしがやって来た理由は、あなた方のために害を取り除くためである。侵略乱暴をすることはないから、恐れることはない。また、わたしが引き返して覇上に陣を構えた理由は、諸侯の到着を待って、協定を結ぶためにすぎない。」と。そこで人を遣わして、秦の役人とともに諸県の村里をまわってこれを告げさせた。秦の人びとは大いに喜び、我先にと牛や羊や酒食を持参して、「沛公の」兵士に差し出してもてなそうとした。すると沛公はまた辞退して、受け取らないで言った、「〔我が軍の〕倉庫の穀物は多くて、不足しているわけではない。あなたたちにもものを費やさせるようなことはしたくない。」と。秦の人びとはますます喜んで、ただただ沛公が秦王になってくれないうことだけを心配した。

1 覇上 今の陝西省西安市の東、霸水の沿岸にあった地名。秦の都咸陽に近い。

2 秦王子嬰 ?―前二〇六。始皇帝の孫。

3 軹道 今の陝西省西安市の北東。

4 懐王 ?―前二〇五。戦国時代の楚王の孫。項羽らによって擁立された。



5 樊噲 ?―前一八九。劉邦の部下。

6 張良 ?―前一八六。劉邦の参謀。韓信・蕭何とともに「三傑」の一人。

④ 項羽と対峙したときの言動

【書き下し文】

楚・漢久しく相持して未だ決せず。丁壮は軍旅に苦しみ、老弱は転餉に罷る。漢王・項羽相与に 1 広武の間に臨みて語る。項羽 漢王と独身にて挑戦せんと欲す。漢王 項羽を数めて曰はく、「始め項羽と俱に命を懷王に受け、『先に入りて関中を定むる者、之に王とせん。』と曰ふも、項羽 約に負き、我を 2 蜀・漢に王とす。罪一なり。項羽 3 卿子冠軍を矯り殺し、而して自ら尊くす。罪二なり。項羽已に趙を救ひ、当に還りて報ずべきに、擅に諸侯の兵を劫かして関に入る。罪三なり。懷王『秦に入るも暴掠する無かれ。』と約せしむるに、項羽 秦の宮室を焼き、始皇帝の冢を掘り、私かに其の財物を収む。罪四なり。又彊ひて秦の降王子嬰を殺す。罪五なり。詐りて秦の子弟を 4 新安に阬にすること二十万、5 其の將を王とす。罪六なり。項羽 皆 諸將を善地に王として、故主を徙し逐ひ、臣下をして争ひ叛逆せしむ。罪七なり。項羽 6 義帝を 7 彭城より出だし逐ひて、自ら之に都し、8 韓王の地を奪ひ、9



梁・楚に并はせ王たりて、多く自ら予ふ。罪八なり。項羽 人をし  
て陰かに義帝を10 江南に弑せしむ。罪九なり。夫れ人臣為りて其の  
主を弑し、已に降れるを殺し、政を為すこと平ならず、約を主る  
も信ならざるは、天下の容さざる所にして、大逆無道なり。罪十な  
り。吾 義兵を以つて諸侯を従へて残賊を誅す。刑余の罪人をして  
項羽を撃殺せしめん。何を苦しみて乃ち公と挑戦せん。」と。

### 【口語訳】

楚・漢の両軍は長らく対峙して、まだ勝敗が決していなかった。  
若者は戦闘で苦しみ、老人と子供は兵糧の運搬で疲れていた。漢王  
と項羽は、互いに広武山の付近で向きあって話をした。項羽は漢王  
に単身で戦いを挑もうとしたが、漢王は項羽の罪状を並べたてて責  
めて言った、「かつて、そなたとともに懐王さまから命を受けたと  
き、『先に関中に入って平定した者を、その王にしよう。』とい  
う話であったが、そなたはその約束を破ってわたしを蜀・漢の王と  
した。これが第一の罪だ。そなたは卿子冠軍を君主の命令と偽って  
殺し、かつてに高位についた。これが第二の罪だ。そなたは趙を救  
援したとき、帰還して〔懐王さまに〕報告をすべきであったのに、  
かつてに諸侯の兵を脅迫して関中に入った。これが第三の罪だ。懐  
王さまが『秦に入っても乱暴や略奪はするな。』と〔我々に〕約束  
させなされたのに、そなたは秦の宮殿を焼き、始皇帝の墓を掘り、  
こつそりその財物を自分のものにした。これが第四の罪だ。また、

降伏した秦王の子嬰を無理に殺した。これが第五の罪だ。秦の若い  
兵士たちをだまして新安で二十万人も生き埋めにし、その將軍を王  
とした。これが第六の罪だ。そなたは「自分の」諸將をすべて良い  
土地の王として、もとの君主たちを追いだし、その臣下たちが争つ  
て「もとの君主に」叛逆するようにさせた。これが第七の罪だ。そ  
なたは義帝さまを彭城から追いだして自分の都にし、韓王の地を奪  
ったり、梁と楚を合わせてその王となったりして、多くを自分の  
領土とした。これが第八の罪だ。そなたは人に命じて江南で義帝さ  
まを殺させた。これが第九の罪だ。そもそも、臣下でありながら自  
分の主君を殺したり、すでに降伏した者を殺したり、政治のやり方  
が不公平であったり、盟約の中心となりながら信義を貫かなかつた  
りするようなのは、世の中の誰もが容認しないことであり、大逆無  
道の行いである。これが第十の罪だ。わたしは正義の軍隊として諸  
侯を従え、残忍な逆賊を討伐するのだ。「普通の者を使うのはもつ  
たいない。」前科者にそなたを殺させてやろう。どうしてわざわざ  
貴公に戦いを挑んだりなどするものか。」

1 広武 今の河南省滎陽市けいようにある山。

2 蜀・漢 「蜀」は今の四川省一帯。「漢」は今の陝西省南部と湖北  
省北西部。

3 卿子冠軍 「卿子」は人に対する尊称、「冠軍」は軍の総司令官の



意。宋義そうぎ（生没年未詳）をさす。宋義は、かつて懐王から上將軍に任命された。――

4 新安 今の河南省新安県。

5 其の将 章邯しょうかん（？―前二〇五）のこと。

6 義帝 懐王のこと。

7 彭城 今の江蘇省徐州市。楚の首都。

8 韓王 ？―前二〇六？。名は成。

9 梁 戦国時代の梁（魏）の国が領有した地方。今の山西省南西部・河南省北部。

10 江南 長江下流の南の地域。

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

噫 ( )

〈例文〉  
 噫 亦 異 之 大 者 也

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

使 ( )

〈例文〉  
 自 是 日 抱 就 犬 習 示 之 使 勿 動 稍 使 与 之 戲

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

但 ( )

〈例文〉  
 但 手 熟 爾

解答を見る

## 『莊子』 養生主編

## 【書き下し文】

庖丁<sup>ほうてい</sup> 文惠君<sup>ぶんけいくん</sup>の為<sup>ため</sup>に牛を解く。手の触るる所、肩の倚<sup>よ</sup>る所、足の履<sup>ふ</sup>む所、膝の踏<sup>た</sup>つ所、砉<sup>くわく</sup>然たり嚮<sup>きやう</sup>然たり、刀を奏<sup>す</sup>むること騞<sup>くわく</sup>然たり。音に中<sup>あ</sup>たらざる莫<sup>な</sup>く、桑林<sup>さうりん</sup>の舞に合<sup>あ</sup>ひ、乃<sup>すなは</sup>ち經首<sup>けいしゆ</sup>の会に中たる。

文惠君<sup>ぶんけいくん</sup>曰<sup>い</sup>はく、「<sup>あ</sup>喜<sup>あ</sup>、善<sup>い</sup>いかな。技<sup>け</sup>蓋<sup>だ</sup>し此<sup>こ</sup>に至<sup>いた</sup>るか。」と。庖丁<sup>ほうてい</sup> 刀<sup>す</sup>を積<sup>す</sup>てて対<sup>こ</sup>へて曰<sup>い</sup>はく、「臣<sup>しん</sup>の好<sup>あ</sup>む所の者<sup>もの</sup>は道<sup>みち</sup>なり。技<sup>け</sup>よりも進<sup>ま</sup>る。始<sup>は</sup>め臣<sup>しん</sup>の牛<sup>う</sup>を解<sup>と</sup>くの時<sup>とき</sup>、見<sup>み</sup>る所<sup>ところ</sup> 牛<sup>う</sup>に非<sup>あ</sup>ざる者<sup>もの</sup>無し。三年<sup>さんねん</sup>の後<sup>のち</sup>、未<sup>い</sup>だ嘗<sup>かつ</sup>て全<sup>ぜん</sup>牛<sup>う</sup>を見<sup>み</sup>ざるなり。方<sup>かた</sup>今<sup>いま</sup>の時<sup>とき</sup>、臣<sup>しん</sup> 神<sup>しん</sup>を以<sup>も</sup>つて遇<sup>あ</sup>ひて、目<sup>め</sup>を以<sup>も</sup>つて視<sup>み</sup>ず。官<sup>くわん</sup>知<sup>ち</sup>は止<sup>や</sup>みて神<sup>しん</sup>欲<sup>よく</sup>行<sup>かう</sup>はる。天<sup>てん</sup>理<sup>り</sup>に依<sup>よ</sup>りて、大<sup>だい</sup>郤<sup>き</sup>を批<sup>ひ</sup>ち大<sup>たい</sup>窾<sup>くわん</sup>に導<sup>し</sup>ひ、其<sup>そ</sup>の固<sup>こ</sup>然<sup>ぜん</sup>に因<sup>よ</sup>る。枝<sup>し</sup>徑<sup>けい</sup>肯<sup>こん</sup>綮<sup>けい</sup>にも未<sup>い</sup>だ嘗<sup>かつ</sup>みず。而<sup>しか</sup>るを況<sup>いは</sup>んや大<sup>たい</sup>軻<sup>こ</sup>をや。良<sup>りやう</sup>庖<sup>ほう</sup>は歳<sup>とし</sup>ごとに刀<sup>か</sup>を更<sup>か</sup>へて割<sup>は</sup>し、族<sup>しゆ</sup>庖<sup>ほう</sup>は月<sup>げつ</sup>ごとに刀<sup>か</sup>を更<sup>か</sup>へて折<sup>せ</sup>る。今<sup>いま</sup>臣<sup>しん</sup>の刀<sup>か</sup>は十九<sup>じゅうじゅう</sup>年<sup>ねん</sup>、解<sup>と</sup>く所<sup>ところ</sup>は数<sup>すう</sup>千<sup>せん</sup>牛<sup>う</sup>なり。而<sup>しか</sup>るに刀<sup>か</sup>刃<sup>じん</sup>は新<sup>しん</sup>たに硎<sup>ぎやう</sup>より発<sup>は</sup>せるがごとし。彼<sup>か</sup>の節<sup>せつ</sup>なる者<sup>もの</sup>には間<sup>ま</sup>有<sup>あ</sup>りて、刀<sup>か</sup>刃<sup>じん</sup>なる者<sup>もの</sup>には厚<sup>あつ</sup>み无<sup>な</sup>し。厚<sup>あつ</sup>み无<sup>な</sup>きものを以<sup>も</sup>つて間<sup>ま</sup>有<sup>あ</sup>るところに入<sup>い</sup>るれば、恢<sup>くわい</sup>恢<sup>くわい</sup>乎<sup>こ</sup>として其<sup>そ</sup>の刃<sup>じん</sup>を遊<sup>あそ</sup>ばすに於<sup>お</sup>いて必<sup>かなら</sup>ず余<sup>あま</sup>地<sup>ち</sup>あり。是<sup>こ</sup>を以<sup>も</sup>つて十九<sup>じゅうじゅう</sup>年<sup>ねん</sup>にして刀<sup>か</sup>刃<sup>じん</sup>新<sup>しん</sup>たに硎<sup>ぎやう</sup>より発<sup>は</sup>せるがごとし。然<sup>しか</sup>りと雖<sup>いへど</sup>も族<sup>しゆ</sup>に至<sup>いた</sup>る毎<sup>ごと</sup>に、吾<sup>われ</sup>其<sup>その</sup>の為<sup>ため</sup>し難<sup>がた</sup>きを見<sup>み</sup>、怵<sup>ちゆう</sup>然<sup>ぜん</sup>として為<sup>ため</sup>に戒<sup>かい</sup>め、視<sup>み</sup>ること為<sup>ため</sup>に止<sup>とど</sup>まり、行<sup>すす</sup>むこと為<sup>ため</sup>に遅<sup>おそ</sup>く、刀<sup>か</sup>を動<sup>うご</sup>かすこと甚<sup>た</sup>だ



微なり。諫然として已に解くれば、土の地に委つるがごとし。刀を  
ひつけて立ち、之が為に四顧し、之が為に躊躇して志を満たし、刀を  
善ひて之を蔵む。」と。

文惠君曰はく、「善いかな。吾 庖丁の言を聞きて、養生を得た  
り。」と。

### 【口語訳】

庖丁が文惠君のために牛を料理した。手で触り、肩を寄せ、足を  
ふんばり、膝立てをする彼の動きのたびに、さくさくぱりぱりと音  
がたち、牛刀の動きにつれてざくざくと響きわたる。それがみな音  
律にかなって快く、（殷の湯王のときの名曲である）桑林の舞樂に  
も調和して、また（堯のときの名曲である）経首の音節にもかなっ  
ていた。

文惠君は（すっかり感嘆して）、「ああ、見事なものだなあ。技  
もなんとここまで至るものか。」と言った。庖丁は牛刀を手から離す  
と答えて言った、「私の求めておりますものは道でございまして、  
手先の技以上のものです。私をはじめて牛の料理をいたしましたこ  
ろは、目に見えるものは牛ばかり（、手のつけどころもわかりませ  
ん）でしたが、三年たってからは、もう牛の全体は目につかなくな  
りました。このごろでは、私は精神で牛に対していて、目で見てい  
るではありません。感覚器官に基づく知覚ははたらきをやめて、





精神の自然な活動だけがはたらいっているのです。天理（自然な本来の筋道）に従って、（牛の皮と肉、肉と骨の間の）大きな隙間に刃をふるい、大きな空洞に沿って走らせて、牛の体の本来のしくみにそのまま従ってゆきます。支脈と経脈が入り組み、肉と骨とがかたまつたような微妙なところでさえ、試し切りをするようなことはありません。まして大きな骨のかたまりならなおさらです。腕のよい料理人は一年ぐらいで刃こぼれして牛刀を取り替えているのですが、たいていの料理人は一月ごとに（骨につき当てて）牛刀を折ってしまい、取り替えています。ところで、私の牛刀は十九年も使っていて、数千頭もの牛を料理してきましたが、その刃先はまるでたつた今砥石といしで仕上げたばかりのようです。あの関節というものには隙間があり、牛刀の刃先というものにはほとんど厚みがありません。その厚みのないものを隙間のあるところに入れていくのですから、まことに広々としたもので、刃先を動かすにも必ずゆとりがございます。だからこそ、十九年も使っているのに、牛刀の刃先がまるでたつた今砥石で仕上げたばかりのようなのです。ただそうではあっても、筋や骨の集まったところにくるたびに、私はその仕事の難しさを見て、心をひきしめて緊張し、そのために視線は一点に集中し、手の動きも遅くして、牛刀の動かし方はきわめて微妙にいたします。やがてばさりと音がして肉が離れてしまうと、まるで土が地面に落ちたよう（に、切り離れた形跡が残っていないの）です。牛刀を手にひっさげて立ち上がり、四方を見回してしばらく去りが

たくたたずんだうえで心中に満足し、牛刀をぬぐってそれを鞘さやに収めるのです。」と。

文恵君は言った、「すばらしいことだ。わしは庖丁の言葉を聞いて、養生（という真の生き方）の道を会得した。」と。

## 『莊子』 天道編

## 【書き下し文】

世の道に貴ぶ所の者は、書なり。書は語に過ぎず。語には貴きもの有り、語の貴ぶ所の者は、意なり。意には随ふ所有り、意の随ふ所の者は、言を以つて伝ふべからざるなり。而るに世は言を貴ぶに因りて書を伝ふ。世は之を貴ぶと雖も、猶ほ貴ぶに足らざるなり。其の貴ぶは其の貴ぶべきに非ざるが為なり。

……………

桓公 くわんこう 書を堂上に読む。輪扁 りんぺん 輪を堂下に斲る。椎鑿 つゐさく

を積てて上り、桓公に問ひて曰はく、「敢へて問ふ、公の読む所は何の言と為すや。」と。公曰はく、「聖人の言なり。」と。曰はく、「聖人在りや。」と。公曰はく、「已に死せり。」と。曰はく、「然らば則ち君の読む所の者は、古人の糟魄のみ。」と。桓公曰はく、「寡人 書を読むに、輪人安くんぞ議するを得んや。説有らば則ち可なるも、説无くんば則ち死せん。」と。輪扁曰はく、「臣や、



臣の事を以つて之を觀る。輪を斲るに、徐ならば則ち甘くして固からず、疾ならば則ち苦にして入らず。徐ならず疾ならざるは、之を手にて得て心に応じ、口言ふこと能はざるも、数の其の間に存する有り。臣は以つて臣の子に諭すること能はず、臣の子も亦之を臣より受くること能はず。是を以つて行年七十にして老いて輪を斲る。古の人と其の伝ふべからざるものと、死せり。然らば則ち君の読む所の者は、古人の糟魄のみ。」と。

### 【口語訳】

世間で道を求めるために尊重するものは、書物である。

しかし、書物は言葉を連ねたものにすぎない。言葉には大切なものがあって、言葉の大切なものは、その意味内容である。意味内容にはそれが基づいて生まれてきたところがあつて、意味内容の基づいたところは、言葉では伝えられないものである。ところが、世間では言葉を尊重することから、書物を（尊重して）伝えている。世間ではいくら尊重していても、それは尊重するに値しないものだ。彼らの尊重しているものは、本当の尊重すべきものではないからである。

………

齊せいの桓公が（あるとき）堂の上で書物を読んでいた。堂の下では輪扁が（木を削って）車の輪を作っていたが、その椎つちと鑿のみを置いて堂に上ってゆき、桓公に問いかけた、「お尋ねしますが、あなたさまのお読みなのは、どのような言葉ですか。」と。桓公は答えた、「聖人の言葉だ。」と。（輪扁はまた）尋ねた、「聖人は生きていますか。」と。桓公は「もう死んでしまわれた。」と答えた。（すると輪扁は）言った、「それならあなたさまの読まれているのは、古人の残りかすにすぎませんね。」と。桓公は（むっとして）言った、「わしが書物を読んでいるのに、どうして車職人が意見を言っただけでよいだろうか、いや、よくない。弁明ができればよいが、できなければ死罪だ。」と。輪扁は答えた、「私は、自分の仕事の経験に照らして考えているのです。車の輪を作るのに、削り方が甘いと（削った穴に輻やを差し込むのに）緩くて締まりが悪く、削り方がきついと窮屈でうまくはめ込めません。甘くもなく、きつくもないという程よさは、手かげんで会得して心にうなずくだけで、口では説明することはできませんが、そこに決まった一つのこつがあるのです。私はそれを自分の子供に

教えることができず、私の子供もまたそれを私から受け継ぐことができません。そのために、七十のこの年になって老いてしまっても車の輪を作っているのです。昔の人も、そうした人に伝えられないものといっしょに滅んでいきました。してみると、あなたさまが読まれているのは、古人の残りかすにすぎないということです。」と。

参考動画：きりぎりす（こおろぎ）の声



動画：NHK/Getty Images

参考動画：まつむし（すずむし）の声



動画：栗林慧/JAPAN4K/アフロ

参考動画：ひぐらしの声



動画：NHK/Getty Images

参考動画：笙（合奏：笙・横笛・篳篥）



雅楽同友会/ユニフォトプレス

参考動画：三の鼓（合奏：三の鼓・横笛・篳篥）



雅楽同友会/ユニフォトプレス

参考動画：笏拍子（合奏）



雅楽同友会/ユニフォトプレス

参考動画：琵琶（合奏：琵琶・箏・篳篥）



雅楽同友会/ユニフォトプレス